

春季大会発表要旨

(※16号館の教室番号については、現段階では未定のため、当日、受付等でお知らせします)

第一会場 (16号館)

パネル発表

〈一日目〉

江戸川乱歩所蔵資料の活用による 探偵小説研究

石川 巧・落合 教幸・金子 明雄

・川崎 賢子
(デイスカッサント) 浜田 雄介

江戸川乱歩は、欧米における最先端のミステリーをいち早く吸収するとともに、犯罪学、法医学、性科学、心理学を始めとする隣接諸科学の知見を取り入れることに積極的な

作家だった。一九二〇〜三〇年代における都市の近代化、大衆文化の勃興、メディアの発達といった社会状況の変化を敏感に察知し、探偵小説の語り、描写、人物造型、プロット構成などにさまざまな新風を吹き込んだ。戦後は数々の探偵小説雑誌の編集に携わり、探偵小説界の隆盛と後継作家の育成に尽力した。

さらに、乱歩は探偵小説作家であると同時に、その生涯における様々なエピソードが伝説化される偶像であり、現在も新しいファンを獲得し続けている。ドラマや映画、漫画の原作になることも多く、その作品世界は日々新たに解釈し直されているといつてよい。

こうした作家の特質を考えると、特に注目しなければならないのは、彼が膨大な文献資料を駆使して小説の着想や斬新なトリックを生み出す翻案家であると同時に、自作の構想や執筆の過程を事細かに記録保存するマニ

アでもあったということである。乱歩の文学的営為の全貌を明らかにするために、彼が遺した旧蔵資料の整理・分析が不可欠なのである。

立教大学は二〇〇二年三月に旧邸の土地と建物(母屋、洋館、土蔵)を購入するとともに大衆文化研究センターを設立し、和書一三〇〇〇冊、洋書二六〇〇冊、雑誌五五〇〇冊を所蔵することになった。同センターには乱歩関連の膨大な資料が寄託され、原稿・草稿、書簡、切抜資料、手帳・ノート・メモ類、戦時資料、読書ノート・評論執筆用資料、探偵小説・江戸文献に関するカード、雑誌編集や探偵作家クラブの運営に関する資料、書籍の書き込みに関する調査、脚本資料、映像資料、音声資料などが分類保存されている。

また、近年、乱歩研究は海外においても注目されつつある。「乱歩コンファレンス」を起点に始まった日本とアメリカの研究活動はすでに二〇年近い歴史を重ねているし、二〇一六年一〇月にはパリ日本文化会館とパリ・デイドロ大学において国際シンポジウム [Edogawa Ranpo ou les labyrinthes de la

modernité japonaise (江戸川乱歩あるいは近代日本の迷宮)」が開催されている。シンポジウム企画者のひとりであるジェラルド・ブルーが、「一九七〇年代に入ってから、大衆文化の再評価、文学理論の中の読者論、視覚論、ジェンダー論、ポストコロニアル理論、カルチュラル・スタディーズなどの諸理論により、乱歩の重要性とモダニティが再発見・再評価されるようになったのは、先ずは、アメリカと日本であった。今回のシンポジウムは、以上の変遷をもとに、また、没後五年目に、日・米・欧の三つの視点を交差しながら、江戸川乱歩という人物、その作品、その背景とディスカールの再評価の契機となった」(『江戸川乱歩、巴里にやって来た。』、『大衆文化』第16号、二〇一七年三月)と評価するように、乱歩の存在は欧米においても大衆文化やモダニズムとの関連において再評価されつつある。

今回のパネルは、こうした国内外の研究状況を踏まえて乱歩所蔵資料を広く公開していくための取り組みである。発表を行う四名は、いずれも大衆文化研究センターで研究活動し、日頃から乱歩所蔵資料の整理・保存につ

いて議論を交わしてきたメンバーである。二〇一七年からは立教SFR(立教大学学術推進特別重点資金)を取得し、(1)乱歩関連資料の活用による「芸術的な文学」の領域と「探偵小説」との関係性に関する研究。

(2)大正後期以降の探偵小説ジャンルの成立を支えた読者層の文化的特質と、大衆の文学メディアを通じた探偵小説との具体的なインタクトの様相の研究。(3)大正期以降の文学的モチーフの背景となっている一九世紀末から二〇世紀にかけての進化論、天才論、精神医学言説、および、その展開の具体的媒介となった海外文学と大正期以降に特徴的な文学的モチーフとの関連性についての研究。

(4)大正期以降の文学に特徴的なモチーフやその物語的展開と乱歩作品のモチーフや物語の形式との関連性の具体的な研究。(5)現在の有力な探偵小説研究者との意見交換を通して、探偵小説研究を文学史的記述に接続する意義やその可能性についての研究。——

今回のパネルでは、まず、落合教幸が「乱歩資料の保存と公開に関する方法論の構築」と題して所蔵資料とその現状に関する報告を

行い、その後、石川巧「一九二〇～五〇年代の探偵小説雑誌の編集と出版に関する乱歩の役割」、金子明雄「乱歩を中心とする探偵小説の文学史的な再定位」、川崎賢子「探偵小説におけるセクシュアリティ表象と乱歩の男色資料蒐集」の順で発表を行う。後半は、デイスカッサントをお願いした浜田雄介氏の問題提起を経てフロア全体の議論に移行する。登壇者の発表はコンパクトに収め、議論の時間を十分に取ることでより多くの方々との意見交換をしたいと考えている。

個人発表

〈二日目〉

「同性愛者」の語り

——吉屋信子の「屋根裏の二処女」と
「或る愚しき者の話」を中心に

鄒 韻

ハルプリンは『同性愛の百年間』において「セクシュアリティは、性のアイデンティティ

を生み出し、われわれ一人ひとりの性をそれぞれに個人的な性質をもつたものとした」(四三頁)と論じている。同性愛は近代の知的空間において、罪であった同性愛行為から病態化された同性愛者種族の問題にと「種族」の問題に転化する。換言すれば、同性愛行為のない欲望は、徐々に特殊な人格として囲い込まれ、周縁化・客体化させられるようになる。このようなコンテキストにおいて、異性愛から排除されつつも、敢えて当時の医学での呼称「変態」等を自称し、「自身自身について語り始め、その正当性あるいは「自然性」を主張し始め」(ミシェル・フーコー「知への意志…性の歴史」)る人々が登場し、医学的な言説を逆転させようとする。

本発表は近代日本文学におけるレズビアンという題材の浮上とともに、性科学の客体から主体への逆転の語りの可能性を探り、吉屋信子の作品における「同性愛者」の語りを中心に考察したい。まず、『少女画報』に掲載された「花物語」シリーズの「日陰の花」(一九二〇年)及び同年に発表した自伝小説の「屋根裏の二処女」における閉塞的な空間のメタファーと「禁制」の境界線を超える女

同士の愛の表象について考える。さらに「花物語」の「黄薔薇」(少女画報・一九二三年)におけるレズビアンの具現化・サッフォールの表象について論じたい。最後に、吉屋が私家版『黒薔薇』(一九二五年一月〜八月)に掲載した女同士の愛を語る「或る愚しき者の話」を中心に、「身体の中に反自然の恐ろしい血が流れている」「愚かしき者」という自己表象を明らかにする。

本発表によって、近代医学の言説に抑圧され、客体化されつつ主体性を模索する性的アイデンティティ生成の問題を、吉屋信子の小説を通して検討する。

「男」になるといふこと

——吉行淳之介文学にみる少年をめぐって

遊 書 叢

上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子による『男流文学論』(一九九二年)は吉行淳之介の作品を取り上げ、フェミニズムの立場か

らそれを強く批判している。確かにフェミニズム批評は吉行淳之介文学におけるミソジニー(女性嫌悪)を暴き出し、吉行淳之介を論じる際に有効な手段になると思われる。しかし、その反面、吉行淳之介の作品における男性自身の問題が看過され残されることもあるだろう。

発表者は、「男」は「女」と同様にジェンダー化された存在としてとらえるという男性学の視点から吉行淳之介の作品を読み直し、彼の作品のなかに見て取れる男性の苦悩を拾い上げたいと思う。男性は従来人間を代表するような存在、無性的な存在として見なされてきた。だが、男性はまさしく「男」になるというジェンダー化の過程を経験しているのだ。そして、「男」になることの抵抗や苦痛を問題視することは、男性を問題化する有効な視点だと考える。

本発表は、吉行淳之介の「夏の休暇」「梅雨の頃」、「春の声」、そして「童謡」を取り上げ、それらの主人公の少年に焦点を当てる。少年であること、つまり子供の身体でいることは、これから思春期を迎えたりして大人になつていくことを意味している。少年にとつ

第二会場（16号館）

個人発表

〈一日目〉

敗戦を跨ぐ身体

——井伏鱒二「遙拝隊長」と「傷痍軍人」
表象を手がかりに

市川 遥

て大人になっていく時期には、第二次性徴を迎え非常に標識的な身体の変化も出てくる。そのため、じぶんの身体と他人・異性の身体、また「男」になるということを過剰に意識してしまう時期だと考えられる。そこで、本発表は主人公の少年が成長するにつれて「男」になることを強いられたとき、もしくは意識したときにどういった思いにとらわれるのかをめぐって考察を行い、吉行淳之介の作品における男性問題を抽出したい。

井伏鱒二「遙拝隊長」は、一九五〇年二月に雑誌『展望』に掲載された。本作品は、戦場での事故で「氣違ひ」な「びつこ」となる、元陸軍中尉岡崎悠一が中心人物として描かれる。帰郷した悠一は戦中、英雄として村に歓迎されるが、敗戦後も戦争の終結を理解しないために、村人たちに滑稽視され、疎まれる。このような「手のひら返し」が描かれることから、戦後における価値の転換を描いた作品であるとされる。

先行論では悠一が敗戦後「氣違ひ」視されることによって「戦争が異常であった」とい

うことを浮き彫りにする点から井伏の戦争批判として捉えられており、本発表もそれを否定するものではない。

しかし、むしろここにおいて重要なのは、戦争の異常さを強調したことだけではなく、敗戦に伴う価値観の変容を乗り越えられた人間と乗り越えられなかった人間があり、前者が「正常」、後者が「異常」とされたことをごのように描出したのかという点である。

本発表では悠一の「氣違ひ」そして「びつこ」と負傷する足（下半身）の描写を「傷痍軍人」イメージの変容と関連づけながら分析する。悠一が「傷痍軍人」と呼ばれることはないが、作品内の描写から該当すると考えられる。

敗戦後の傷痍軍人は「名誉の負傷者」として称えられるのではなく、傷ついた姿は哀れまれ、時に「加害者」として疎まれるという、まさに転換をはらんだ存在としてまなざされる。同時代言説との関連を考えると、「氣違ひ」と「びつこ」という設定は作品の読みに大きな影響を与えており、再考する必要がある。

その際、「氣違ひ」については現在の「精神障害兵士」、もしくは敗戦を理解できず戦

争から帰って来られないという意味においての「未復員者」に関する考察を「びつこ」については足(下半身)の描写とそこで喚起される動作イメージを補助線として用い、遥拝隊長」における「傷痍軍人」表象の達成と可能性について考察する。

中野重治「梨の花」論

——「被压迫民族の文学」を参照軸として

廣瀬陽一

本発表の目的は、中野重治「梨の花」(『新潮』一九五七年一月～五八年二月号)を、彼が一九五四年四月に発表したエッセイ「被压迫民族の文学」(『岩波講座 文学』第三卷)の文脈の中に位置づけて読解することにある。中野はこのエッセイで、サンフランシスコ講和条約・日米安保条約によって、「被压迫民族の文学であったものが被压迫民族の文学となり、それを、かつて被压迫民族であつて今は被压迫民族となつた日本人が考えねばならぬ」事態に直面せざるを得なくなつたと述べ

た。その上で、これからの日本文学を被压迫民族の文学と捉え、日本の近現代文学を総体的に見直すことを主張した。ここで注目すべきは中野が講和条約・安保条約を、一九〇四年の日韓議定書になぞらえていることだ。高榮蘭が批判したように、彼はここで、「安保条約以後の「日本」と一九四五年以前の「朝鮮」を同じ「植民地」として位置づけている」(『戦後』というイデオロギー「二〇一〇年」)。

日本人からのこの種の発言は、過去の植民地支配に対する加害責任の捨象と否定されるのが常だが、彼の認識もこの限界を超えるものでなかつたのだろうか。この疑問を解く鍵となる小説こそ、日韓議定書後まもない一九〇六年頃を物語内時間の起点としている小説「梨の花」に他ならない。

四歳頃に「二本田」に転居してきた良平が、小学生時代に見聞きした村の様子などを描いた「梨の花」は、多かれ少なかれ中野の伝記的事実と関連づけられ、彼の郷土への愛着や美意識が読み込まれた。しかし「被压迫民族の文学」を踏まえると、日本人が戦後も朝鮮人など「被压迫民族」の歴史や文学に無知・無関心なままである要因を、自らの幼少年期

の体験を素材にして問い直そうと試みた小説という、従来の解釈とは全く別の「梨の花」像が浮かび上がってくる。本発表ではこの視座から「梨の花」を読解することで、戦後の中野の朝鮮問題に対する関心の所在を明らかにしたい。

安部公房「人魚伝」論

——「ぼく」と人魚の関係

岩本知恵

本発表は安部公房「人魚伝」(『文学界』一九六二年六月)を取り上げ、主人公「ぼく」と人魚の関係性について考察を行うものである。特に「ぼく」と人魚の関係について、非対称か否か、暴力的か否かという議論を超えて、どのような関係性が成立しているのか検討を試みたい。

本作は人魚に恋をした「ぼく」と人魚との同棲生活の始まりから破綻までを描いた物語である。下半身が魚である人魚と性交を行うことのできない「ぼく」は、彼女の眼を舐め

て涙を吸うことを最高の快楽とし、この行為に関係性の成就を見出す。しかしその涙は人魚にとっては食欲の表現であり、彼女は自身の涙のもつ再生作用を利用して毎晩「ぼく」を食べていたのだということが明らかになる。つまり関係性に対する「ぼく」の一方的な思い込みや、認識の不一致が露呈するのである。

人魚を人間的な価値観で規定したために破局が訪れるというこのような展開から、本作を人間中心主義への批判であると位置づけるのは容易い。しかし、単に「ぼく」の一方的な思い込みの露呈のみをもって本作の人間中心主義批判を論じてしまつては、権力関係の転倒という図式による人魚の優位性の担保に帰結し、人間対人魚という二分法的な図式は保持されてしまう。ここで肝要なのは、「ぼく」と人魚の関係性がいかに二分法的な対立図式を超えて、相互的な交渉を行っていたかを明らかにすることであろう。

そこで本発表では非対称であり相互に理解不能な関係性を、ある種の関係性の成立として読解し、そこに相互に変化を引き起こす共同的な側面を捉えるを試みる。

安部公房の『砂の女』における「信頼できない語り手」

解 放

『砂の女』のナレーションは極めて特異である。語り手は序文において、「男」の「行方不明」の原因を憶測するが、提示される憶測のそれぞれは語り手自身によって否定されている。注目すべき点は、そうした否定が、「男」の死体の不在によって喚起されていることである。しかしながら、「男」が生死のいずれにしても、人々の視野を逃れた場所に消えたことは事実である。言い換えれば、語り手が如何なる憶測をしようとも、全て未確定の水準で語らざるをえず、「男」の存在の証と言えるその身体性に到達しうるわけではない。語り手の常識論の中では、事実を確認できることを前提にしているが、皮肉なことにテクストで確認できる事実とは「男」の不在である。こうした事実としての不在は、『砂の女』のテクスト全体におけるジレンマを指示しているのではないだろうか。なぜならば、「男」

は現在、失踪したと法的に宣告されることによって徹底的な不在となったため、語り手が不在となった「男」について語る序文以降の記述も、事実性によって充足された語りとは言い難いからである。

テクストのこうした設定は、語り手を決定できない状況に追いつめ、語り手は、こうした曖昧な状況に長く抑圧されることによつて、その語りに変化が現れ、とりわけその信頼性を喪失したのである。「信頼できない語り手」を研究する際、しばしば言及されるのが、William Faulkner の *The Sound and the Fury* と Kazuo Ishiguro の *The Remains of the Day* のナレーションである。Benji は「白痴」であるため、そのナレーションの信頼性が問われるのは言うまでもない。Stevens は、過去の記憶が不明瞭になっているため、そのナレーションの信頼性も曖昧になっていることは明らかである。しかし、『砂の女』における語り手の信頼されない理由は、明らかに上記の作品とは異なる。本研究では、これらとの比較も交えつつ『砂の女』における「信頼できない語り手」の特質を考察してみたい。

「二四郎」

『三四郎』における知の闘争

——「文芸上の真」と「科学上の真」に

ついで

吳 勤 文

『三四郎』（明治四十一年九月一日〜十二月二十九日「朝日新聞」）における科学者の野々宮に対する美禰子の結婚願望の挫折、明治ロマン主義と美禰子のイメージの生成に与えたラファエル前派絵画の影響は、先行論によって説明されてきた。その背景を前提に、本発表は文学論ノートの「文芸ノ Psychology」、「文学論」、「文学評論」を手がかりにして、美禰子と野々宮の飛行機論争による「文芸上の真」と「科学上の真」の争いの表象とイギリスロマン主義の関連性を明確にしていきたい。

ラスキンを科学的分析で読み光線を研究する野々宮に対して、詩的な美禰子のイメージの基底となるのは、自然への想像力を重んじ

るイギリスロマン主義思潮そのものが考えられる。野々宮の「科学上の真」の価値観による想像への批判と家庭の可能性の放棄が、明治期の家父長制の現実に対する美禰子の恋の挫折に繋がる。「自然支配」を唱えた経験主義哲学者ベーコンの論文集を携えて上京した三四郎の無知と相對して、ラファエル前派の絵画に学んで人間の靈性を見出す原口画伯、イブセンの意義を解釈する文芸活動家の与次郎、ハムレットのような女性不信を抱えて夢の女に詩に例えられた広田先生は、それぞれイギリスロマン主義の「靈性」、「個人」、「潜在意識」の重視の表象として、美禰子の自我の挫折を見つめていく。

『三四郎』の表現は、美禰子のイメージの生成及び国家と個人の關係に対する知識人たちの思考を通じて、科学主義に対するロマン主義の敗北を凝視し、読者を美禰子の青春が封じ込められた「文芸上の真」に導いていく。『三四郎』の「文芸上の真」は、理不尽な社会規範に対する「個人」の自由なる存在への人間の欲求に根ざしている。

芥川龍之介「馬の脚」論

——狂人の日記を信じる「わたし」の

再考——

金 香 花

芥川には〈精神異常〉を題材とした作品が多数ある。初期の「二つの手紙」、中期の「奇怪な再会」、晩年の「馬の脚」、「河童」等いずれも幻覚や妄想、錯覚を見る主人公の思い描く彼方の世界が描かれており、その世を介して〈正常者〉のいるこの世を逆照射するという仕組みがこれらの小説の共通点である。そしてそれぞれの作品には狂人の物語を取り上げる書き手の存在「予」、「私」、「わたし」、「僕」が明記されている。特に「馬の脚」の場合、他三作品とは違って書き手の「わたし」が直接作中に登場し、物語の世界に絡んでいく。しかしその「わたし」が〈馬の脚〉になった半三郎の日記を信じようとして、それを一蹴する〈正常者〉たちの妄を破ろうとしたため、半三郎と同様に「わたし」も〈異常者〉、即ち狂人と看做されている。「わたし」は虚偽

に満ちた人間社会を見抜いたが故に、殊更彼方の世界に活路を見出そうとしたのである。結論から言うと、書き手の「わたし」は狂人ではなく、人間世界や現実社会に対する不満、批判、反抗精神から意図的に世間と反対の立場を取り、所謂「反逆者」に成り済ましたのである。

本作品の舞台設定が北京となっており、作品名も中国の〈露馬脚〉（真相を現す）という熟語を連想させるほか、ユーモラスで風刺的な筆致で敢て社会批判や制度批判をする作者の客観視するスタンスに、多くの中国の芥川研究者の関心が寄せられている。然しながら、「馬の脚」の先行研究には典拠や素材調べに重点を置いた論や、ポストコロニアルの観点からの論稿が多い一方、作品内容そのものは余りに脚光を浴びていないようである。本発表では、まず「わたし」によって紡がれている半三郎の物語と、世間で取り沙汰される半三郎の物語をそれぞれ取り上げその差異を考察する。次に、敢えて幻想譚を信じようとする「わたし」の内実を光を当て〈異常者〉と看做されてきた書き手「わたし」の存在を新たに捉える。

第三会場（16号館）

個人発表

〈二日目〉

戦前昭和の「国家」を超えた

「市井の学」

——性民俗学と佐藤紅霞

大尾 侑子

欧米列強による開国への圧力のなかで、日本が急速な「近代化」を迫られたのは江戸末期に遡る。官僚や知識人、実業家らの存在によって「近代国家」としての日本社会が形作られていくなか、近代化が西欧化と同義のものとして経験されたことは現代に至るまで日本社会の自己認識を大きく規定する契機となった。

西欧社会を模して「近代国家日本」の創造を目指した明治政府は、官学アカデミズムを機能分化させると共に、その領域から「性」を分離していく。その結果、「知の国家の管

理と無関係ではいられなくなった近代の学者は、江戸の学者のように、こだわりのない自由な態度で、性の問題をとりあつかうということが、なくなったのであった（中沢新一「解題 浄のセクソロジー」『南方熊楠コレクション 浄のセクソロジー』河出文庫、二〇一五年、十二頁）。

こうしてアカデミズムに地位を確立していった柳田民俗学から抜け落ちていた「性」の民俗学は、特殊風俗研究に没頭する市井の書き手によって探求されていくこととなったのである。とくに大正末期から昭和初期にかけては、特殊風俗雑誌や通俗性科学雑誌が多く発刊された時代であり、アカデミズムの外部に書物を媒介とした知的共同体が形成された点は看過できない。

これを踏まえて本発表では、戦前昭和に市井の領域から性民俗学を探索し、『世界性欲学辞典』（弘文社、一九二九年五月）や『日本性的風俗辞典』（文藝資料研究会、一九二九年六月）などを執筆した佐藤紅霞（一八九一～一九五七）と、オーストリアの性民俗学者フリードリヒ・クラウスの交流を検討することを通じて、昭和初期に「性」や

特殊風俗といった領域に生起した知性や共同性が国家を超えて連帯した様を追尾する。

〈小説作法〉への抵抗と拡張

——伊藤整『ホオマア物語』における語りの問題を中心に——

尾形 大

一九三〇年前後になると、明治大正期の文学を歴史的に鳥瞰する文学史や、小説の作り方を講じた書籍・論文・講座類が数多く登場しはじめる。その中で私小説や心境小説を伝統的な枠組・方法と見なす認識が定着し、それに対する抵抗や直接的な批判が目立つようになる。既存の伝統的な枠組に飽き足らず、その克服・逸脱を目指す若い作家たちの声が高まっていく。小林秀雄は「私小説論」（一九三五）の中で日本のモダニズム文学への「ヨーロッパの私小説」の影響を指摘し、ジッドやプルースト、ジョイスの作品を「私小説の変種」と呼んだ。「純文学にして通俗小説」の実現を予言した横光利一の「純粹小

説論」（一九三五）もそうした文学動向としての意味合いを持つ。

伊藤整もやはり既存の小説方法の拡張や逸脱を実験・実践し続けたと考えられる。新心理主義の構築から翻訳論、文章論をはじめ各種の研究を重ね発表する一方で、中編小説『幽鬼の街』（一九三七）から戦時下の長編小説『得能五郎の生活と意見』（一九四一）を通して、私小説的枠組を利用しつつ独自の語りの方法を模索している。そしてその実験は、戦後まもなく諸誌に短編の形で分載された『ホオマア物語』（ホオマア『オデユツセイア』）に関して独自の解釈を示したものの。河出書房版『伊藤整全集』編纂時に同題で中篇としてまとめられた『や長編小説『鳴海仙吉』（一九五〇）に至って方法として確立する。そこでは現実の作家と物語の作者、語り手と主人公という水準を意図的に乗り越える方法上の実践がなされていると考えられる。

何よりこうした実践が、連作評論「小説作法」（一九三九・三一―二）や、代作者・伊藤整の手による川端康成『小説の研究』（一九三六）のような小説を知的に分解・分析する営為を通して研究され構築されたとい

う観点から検討し直すことで、文学表現の領域が私小説的枠組を媒介に拡張されていく道筋の一端を浮かび上がらせる試みである。

明治文学再考

——政治性と〈情動〉の領域

【特集の趣旨】

運営委員会

憲法や教育のあり方をめぐって保守反動化の傾向を強める最近の政治状況の中で、「明治」の記憶がしばしば呼び出されている。

一九三〇年代に「明治維新」をバラフレーズした「昭和維新」が語られたり、一九六八年に「明治百年」を言祝ぐイベントが行われたりしたことを想起すれば、これは既視感のある光景であろう。二〇一八年を「明治一五〇年」として語ることは、月並みな反復ではない。なぜ、実体性を欠いた理念としての「明治」、幻想としての「明治」が語られ続けられるのか。

こうした理念や幻想が人々の間で共有され、集団の凝集性を高めていく経緯には、イ

デオロギーだけではなく、〈情動〉の介在を考えることができる。近年、心理学やメディア論で議論される〈情動〉は、個人に属すると考えられてきた感情や心理に対し、それに取まらない身体的な反応を含む間主観的な問題領域である。従来、理性的な個人を前提としてきた政治が、実は、理性を超えた集団的な〈情動〉によっても動かされていることは、今日においてより鮮明になっているところである。

他方、近代文学は常に〈情動〉と向き合ってきたともいえる。個人の内面と深く関わる文学は、個人を成り立たせる政治的・社会的・経済的状況や、それらを支える言語などの制度と切り離せない。殊に創造的物語の領域であるゆえに、制度を共有するほど、裏側にはむしろそれに回収されない曖昧なものを貼りつけてきた。何でも描写する文学の貪欲な欲望は、〈情動〉までも写してしまう場合が

あり、また、文学は読者の共振を媒介するものとして〈情動〉を生み出す契機ともなった。自由民権運動の政治熱を抱え込みつつ成立した近代文学は、政治から内面へと撤退したといわれるが、それは文学が〈情動〉の領域において思考を開始した瞬間でもあった。

現在に至るまで、〈情動〉が一貫して政治の隠れた動因となってきたならば、その発端としての「明治」の文学において、それらの関係性を検証する意味はあるだろう。それは、世俗的な「明治」像の作られ方を照射することにもなるはずである。政治を動かす〈情動〉と言えば、ファシズムの熱狂などが批判的に思い起こされるが、国家主義・全体主義とはまた別の可能性も視野に入れながら、活発な議論を期待したい。

人生觀の群生

—北村透谷、文学研究、ニーチェ熱

木村 洋

特に自由民権運動の衰退期（一八八〇年代後半）から私的なものの擁護という企てが、新進の知識人たちの手で推し進められていく。この文脈で文学が政治に比肩する営みとして発見され、本能や性欲が愛国心よりも重要な人生の指針になり、日露戦争後には告白体の小説（私小説）が繁茂する。従来の研究はこの流れを、文学者が社会との接点を失った風潮として捉えて満足していると思われる。この理解は正しいのか。

その再点検のために本発表は、一八九三年頃から一九〇一年頃に「人生觀」の群生と呼ぶべき事態がしだいに表面化していく動向を考える。北村透谷の文業はこの潮流の出発点に位置している。透谷は西行や芭蕉の詩句に導かれながらある闘争的な「人生觀」を作り上げる（「人生に相渉るとは何の謂ぞ」一八九三年）。さらに同じ時期に勃興する人

物論型の文学研究は、それと同類の「人生觀」を発掘、喧伝する役割を担った。その過程で「人生觀」を研究し、また自己流の「人生觀」を作り出すことが知識人の喫緊の仕事として見出される。

一連の流れに新たな展開を付け加えたのが、主に高山樗牛によつて担われたニーチェ熱だった。樗牛は「美的生活を論ず」（一九〇一年）で「本能」という新奇な概念に支えられた「人生觀」を考案する。この「人生觀」には透谷流の「人生觀」とは異なる種類の闘争性が加味されており、この主張に促される形で若手知識人による「人生觀」の製作はいっそう活発になる。この一連の展開こそは日露戦争後の文壇と統治権力の衝突を準備した。ここから私的で個人的な問題（「人生」）への沈潜が、きわめて政治的な態度表明に繋がるという逆説が見えてくる。

つまり明治期において文学は、知識人の情動を新しい形で政治に結びつけるための装置として働き始める。この文学の働きを視野に入れることで、なぜ文学という営みが新思想の象徴として二〇世紀の思想界に君臨したかはより明確に説明可能になると思われる。

和歌革新の夢

—「まこと」と「情動」をめぐる

松澤 俊 二

明治二〇年代に集中的に現れたいくつもの和歌改良論には、現今の和歌ではもはや歌人主体の「まこと」をありのままに表現することは不可能であるという危機意識が通底している。論者たちは、「まこと」の表出を妨げるいくつかの要因、例えば「題詠」の規矩や用語の古さなどを挙げて、それらをどう新たに時代にあわせて仕立て直すかを説く。また、詠むべき内容の見直しや理想的なしらべのあり方とはどのようなものか、つまり和歌の音楽性も再考することを勧める。そして、一連の議論のなかでとりわけ興味深いことは、和歌を詠む目的として、人心を感化せしむるという「古今集」以来の効用論も呼び戻されてくることだろう。すなわち、歌人各々の「まこと」をありのままに表現するのみならず、それを読んだ人々の心身を共振させる作用（情動）を喚起させる和歌が待望されること

になる。このことが種々の言説を通じて、和歌革新の夢としてプログラムされていったわけだが、では来たるべき三、四〇年代には、どのような改良の成果が現れることになったのか。

本発表はこの問題について、「明星」派ならびに「アララギ」派の歌人たちの言説と短歌、また超党派的に歌人たちが参集した観潮楼歌会における試み、さらには明治天皇の「御製」などを題材にして考えてみたい。先述の『夢』を各歌人たちはどう受け止めたのか。またその和歌を生み出すために歌人たちがどのような試行錯誤をしたのか。作品に寄せられた人々の毀誉褒貶、とりわけ社会の風教維持にも風俗の壊乱にもどちらにも通じるその和歌への恐れとはいかなるものであったのか。これらの諸問題を時代相とともに概観して、特集のテーマに応じたいと考えている。

恥辱と中傷のナシヨナリズム

——帝國的性暴力のフィクション

内 藤 千珠子

現在の「慰安婦」問題をめぐる愛国的な言説には、論理的に説明することが困難なほどの憎悪があふれかえっている。傷と痛みから呼びかけてくる声に対して、なぜこれほどまで情熱的に憤り、拒絶し、憎悪をあらわに否認しなければならぬのだろうか。愛国的な憎悪の回路を可視化するために、恥辱と中傷をキーワードとして、帝國主義的な物語的感性とフィクションの機構について考えてみたい。

軍隊の「慰安所」が公娼制を土台に展開されたものであることは諸研究により明らかだが、公娼制度下の「娼妓」という記号は、複数のレベルで、「恥辱」のなかに置かれてきた。公娼制が国家として恥ずべき制度だという主張から、娼妓を恥ずべき存在と賤業視する語りまで、言説の論理のなかで、恥辱を引き受けるべき身体として表象される娼妓は、中傷

の対象として他者化されている。

近代の軍事主義とジェンダーという観点から考えると、軍事主義が要求する女性の軍事化は、性暴力的な構造を必要としている。性暴力や戦時性暴力の構造を分析的に検証するなら、家長長制とホモソーシャルな連帯を軸とした近代の形成過程で、ナシヨナリズムの論理は、つねに不可視にされたジェンダーの力学を内在するとともに、「娼妓」という他者に積極的に依存することで成り立ってきたといえるのではないだろうか。

具体的には、明治期の娼妓をめぐる言説のなかで、痛み、傷の表象に注目しつつ、恥辱にかかわる情動の回路について論じ、さらに、小説テクストの登場人物として現れるフィクションな「娼妓」と現実を生きる娼妓との差異から、恥辱から転換される中傷、ナシヨナリズムの暴力、物語の力学について検討する。その上で、他者の声を聞き取り合う、對話的な地平を開く現在の可能性について模索したい。

講演 写真の裏書き

——明治文学にみる情動と自照のあり様
をめぐる考察——

ロバートキャンベル

【略歴】

日本文学研究者、国文学研究資料館長。
ニューヨーク市生まれ。カリフォルニア大
卒。ハーバード大学大学院博士課程修了、文
学博士。一九八五年に九州大学文学部研究生
として来日して以来、同学部専任講師、東京
大学大学院教授を経て、二〇一七年四月から
現職。

近世・近代日本文学を専門とし、特に一九
世紀（江戸後期～明治前半）の漢文学と、漢
文学と関連の深い文芸ジャンル、芸術、メデイ
ア、思想などに関心を寄せている。主要編著
書に『読むことの力』（講談社選書メチエ、
二〇〇四・三）、『ロバートキャンベルの小説
家神髓 現代作家6人との対話』（NHK出版、
二〇一二年）などがある。

入会手続き・会費納入等についてのご案内

○入・退会の手続き、住所・所属などの変更、その他会員
としての通知や連絡は、左記の特定非営利活動法人「お
茶の水芸術事業会」日本近代文学会係宛にお願いいたし
ます。

○入会の場合は、お茶の水芸術事業会へ連絡すると申込書
が送られてきます。入会届に記載する推薦人の姓名は必
ず、自署でお願いいたします。

○退会の場合は、その旨を葉書でお届けください。

特定非営利活動法人・お茶の水芸術事業会

「日本近代文学会」係

〒112-8610 東京都文京区大塚二―一―

お茶の水女子大学 理学部三号館二〇四号室

電話・ファックス 〇三（五九七六）一四七八

メールアドレス anjis-info@npo-ochanomizu.org

○会費、機関誌購入代金などは、左記の郵便振替口座にお
振込みください。

記号・番号 00140-1-260401

加入者名 日本近代文学会

六月例会発表要旨

特集

虚構の〈国家〉

——現代文学の闘争と批評性

【特集の趣旨】

運営委員会

これまで文学が創造してきた虚構の〈国家〉は、言語や国境の問題、中央と地方、ジェンダー構造、科学と産業など、現実の国家の内部に隠避された亀裂や揺らぎをさらけ出す役割を果たしてきた。特に、敗戦、原爆、震災など、それまでの共同体のあり方を大きく揺さぶるような出来事によって新たな想像力を掻き立てられた現代小説は、現実の国家が提示する国家像の虚構性をあぶり出していったといえよう。

戦後文学とそれを継承する現代文学は、「満

州国」をはじめとした、まさに国家が捏造した幻想の国家と大東亜共栄圏という虚構の思想に対峙するところから始まった。たとえば、「無国籍作家」といわれる安部公房の思想には、戦時共同体からの脱出と新たな共同体への夢想が読み取れる。あるいは、「日本・日本人」の境界を引く、排除と包摂のプロセスに刻まれた国家をめぐる暴力性は、沖縄文学や在日朝鮮人文学などによって可視化された。

高度経済成長期のひとつの指標である一九六四年の東京オリンピックと同年に、井上ひさしは、『吉里吉里人』の原型を書き、東北の「独立」を夢想した。ここで見られる、中央と地方の不均衡な関係性を転覆させるような想像力は、半世紀後の東日本大震災を経て、二〇二〇年の東京オリンピックに向けて

再燃し始めた、国民国家の再強化への欲望に對しても有効だと考えられる。そのほか、現代文学の作家たちの試みとして、吉村萬世『ポラード病』や多和田葉子『献灯使』、笹野頼子『ひょうすべの国』など、震災後の近未来社会や閉ざされた共同体を描くことで現実の国家のあり方を内部から問い直すような小説も少なくない。

本企画では、以上のような、現実の国家という枠組みを相対化しうる代案的共同体（ないしは視座）を総称して「虚構の〈国家〉」と題し、その共同体の越境性を、現代文学の有する批評性から問う場としたい。ゲストとして、カリブ海文学のクレオール性を研究し、移動や越境について思索を深めておられる小野正嗣氏をお招きし、ご講演いただく予定である。

安部公房『榎本武揚』と 「明治ブーム」

坂 堅 太

安部公房『榎本武揚』は『中央公論』一九六四年一月号より翌年三月号まで計一三回連載され、同年七月に中央公論社より刊行された。この小説を駆動させているのは、元憲兵という過去のために戦後社会から白眼視されている男の、「変節漢」・榎本武揚に対する執拗な関心である。敗戦と明治維新という、二つの歴史的な価値転換期における「忠誠」のあり方を問うたこの小説は、「転向者・榎本武揚のマキアヴェリズムを通して政治の世界の苛酷さと、心情倫理の虚妄を浮き上がらせている」（磯田光一）、「現代の転向問題を扱った、新しい型の転向文学だ」（武井昭夫）というように、転向問題と結び付けて論じられることが多い。作品発表の二年前、安部が日本共産党より除名処分を受けていたことを考えると、そうした読みにも一定の妥当性は認めざるを得ない。

ただ、今回の発表では、もう一つの文脈と

しての「明治ブーム」（竹内好）との関係にスポットを当ててみたい。明治維新百年が近づきつつあったこの時期、論壇では明治を再評価する機運が高まりを見せていた。特に『中央公論』は一九六二年に「明治維新の再評価」という特集を一年間連載するなど、この流れをいち早く作り出した雑誌であり、さらに六三年からは林房雄「大東亜戦争肯定論」の連載を始めている。『榎本武揚』もまた、こ

うした「明治ブーム」の一部を構成するものであり、「明治」を語る様々な言説との関係の中で読まれていたことは間違いない。作者である安部にとっても、そうした文脈は常に意識の中にあっただけである。

では、『榎本武揚』と同時代言説の間にはどのような照応関係を見ることが出来るのか。佐幕／勤皇という二つの「忠誠」を越え、「共和国」という「第三の道」を模索する存在として提示された榎本像は、ナシヨナリズムが色濃く反映されていた「明治ブーム」の中でどのような位置を占めるものであったのか。本発表ではこうした問題について、一九六七年の戯曲化の問題についても視野に

入れながら考えてみたい。

「QMラ」という空間

—— 崎山多美『うんじゅが、ナサキ』をめぐって

村 上 陽 子

崎山多美は、誰か（あるいは何か）に呼びかけられ、その呼びかけに答えるかどうかを決める間もなく出来事に巻き込まれる主人公をこれまで繰り返し描いてきた。『うんじゅが、ナサキ』（花書院、二〇一六年）の主人公「わたし」もまた、差し出し人不明のファイルが届けられたことよって仕事中の自室から引きずり出され、自らの足でシマを歩き回ることになる。ファイルの記述に導かれ、わけがわからぬままに得体の知れぬ人々と出会い、ともに行為する「わたし」を介して交錯することのなかった時間や場所が結びつき、新たな世界が開かれては閉じていく。「わたし」が迷い込む世界の一つに「QMラ」がある。「謎」を意味する「Q」を冠するこ

のムラは、歴史の表舞台で起こる出来事に合意しない人々が地下を掘って作った人工のムラであり、「テキから身を守る保護区」でもあった。すでに滅んで久しく、人々から忘れ去られたその空間には、住人たちが遺した記録や思念、「テキ」と闘うための「特別なクンレン」のメソッドなどが残されており、「わたし」はそれらと向き合っていくことを求められる。

本発表では、歴史の表舞台を支配する「テキ」に武力とは異なる方法で闘いを挑もうとした「Ｑムラ」の未発の闘争に着目すると同時に、「Ｑムラ」が「わたし」という存在を飲み込んで初めて息づきはじめる空間であることの意味を考察する予定である。生身の「わたし」が跳梁することで「Ｑムラ」が過去の遺跡ではなく、現代に息づく空間として現れなおしているのだとすれば、そして「Ｑムラ」を生きた人々が「わたし」という存在によって呼び起こされているのだとすれば、そこにはたとえ「テキ」に潰されようとも、声を聴き、記録を読み、行為しようとする者がいる限り、その都度結び直される共同性のあり方を見出すことができるのではないか。崎山多

美のテクストから、そのような可能性を読み取っていくことを試みたい。

国家はだれのものか

—— 災禍のなかの文学的想像力

中川 成美

後期資本主義下におけるグローバル리즘は、国家の枠組みを超えた経済活動と政策を推し進め、多国籍企業や巨大なIT産業の出現による社会現象の変化は、もはや押しとどめることは出来ない。そう言いながらも一方に耐久力にだいぶヒビの入った国民国家に縋り付こうというバックラッシュも急速に高まって、民族主義や排他主義の跋扈を招いている。

二〇世紀後半から論議される国民国家批判は、次のステップへの模索として捉えられるが、もし国民国家に何らかの美質があるとすれば、それは「国民」の命を国家は保全し、守ってくれるという一点に集約されるであろう。原則的には国家は国民を守り、国民

は国家に義務を果たすという約束を相互に結んでいるのだ。

だが、戦争や災禍の度に、国民は裏切られた。その経験によって感知された国家への懐疑こそが、新たな文学的想像力の磁場となったのだ。二〇一一年三月一日の東日本大震災を契機として巻き起こった文学的環境の変化を手掛かりに、文学にしか持ちえない力を本発表では考えたい。

三・一一と、今よばれるこの未曾有の災禍は、まさしく国民的な経験であり、国家的な悲惨であった。だが、当初海外からも称賛された忍耐に満ちた受苦のあり方が、やがて日本政府によって略取され、現実には被害を受けた人々への保護を曖昧にしていたことは、この七年間の経緯で明らかである。わずか七年で、「風化」などという言葉が行き交い、真の解決に向けた努力は、政策的にも心理的にも前進はしていない。多和田葉子は震災後すぐに『不死の鳥』（二〇一一）を執筆し、やがて『献灯使』（二〇一四）を書いた。津島佑子はその絶筆となった『半滅期を祝って』（二〇一六）で、狂的なファシズムに傾斜していく三〇年後の「二ホン」を描き、笹野頼

子は『ひょうすべの国』(二〇一六)でそのように迷走する日本の現実が、どのような因果をもって転回しているかを切り取った。

これらの作品を想像上のSFや近未来小説、あるいはパロディーや風刺小説とみなすことは簡単である。だが、これらが「現実」そのものを切り取っていると見た時、文学的想像力は災禍の真の受難者を見出した。虚構である「文学」はこの時反転して、「国家」そのものの虚構性を鋭く追求するのである。現代文学の果敢な挑戦のあり方について考えたい。

講演 題目未定

小野 正嗣

【略歴】

小野正嗣(おの・まさつぐ)一九七〇年、大分生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学、パリ第八大学博士号取得。現在、立教大学文学部教授。専攻はカリブ海及びアフリカ作家のフランス語表現の研究。

『ヒューマニティーズ 文学』を二〇二二年刊行。小説家として、二〇〇一年「水に埋もれる墓」で第一二回朝日新人文学賞受賞、二〇〇二年、「にぎやかな湾に背負われた船」で第一五回三島由紀夫賞受賞、二〇一三年、「獅子渡り鼻」で第三五回野間文芸新人賞候補となる。二〇一五年には、「九年前の祈り」で第一五二回芥川龍之介賞を受賞した。

秋季大会所感

一日目

秋季大会特集印象記

特集 ポスト文学史のアクチュア

リテイ

——正史解体後の展望

木村小夜

「明治文学談話会」と文学史

——〈学問史〉の視点から——

中山 弘明

文学史は表現に内在する

安藤 宏

「文学非力説」論議の位置・意義・圏域

松本 和也

空白の「文学史」を読む

——政治と文学——にみるジェンダー・

ポリティクス

中谷いずみ

〈ディスカッサント〉大澤 聡

〈司会〉小平麻衣子

平 浩一

特集の趣旨は一九三〇年代から五〇年代にかけての文学史再考ということで「ポスト文学史」「正史解体後」との表現もテーマにあつたが、この趣旨自体が既に議論を孕んでおり、研究方法・世代の異なる登壇者四氏の受けとめ方も多様なものとして表れた。

中山弘明氏は、明治文学談話会とその文学史叙述の分析というメタレベルの視座より学問史の端緒を開こうとした。始発期の近代文学研究が唯物史観をバックボーンとし、談話の力が北村透谷研究を進めたという考察は、文学史の内容とそれが書かれる時代との深い相関を示唆するものであった。神崎清による大逆事件研究が後の文学史叙述の型を形成し、基地の売春問題等、文学を越える領域にまで研究が及んだことも指摘された。

安藤宏氏は、太宰治と周辺の転向言説を例に、個々の表現に内在する概念として文学史を捉える意義を示した。習作期を経て、紋切型の裁断批評をかわすべくとった『晩年』の〈語らない〉戦略について同時代言説との比較も交えて検証。個人が時代をどう読み、何を表現の空白にこめたか、その偏差の追究が文学史となりうるという。歴史そのものではなくその見方のみがあるという現今の文学史観は歴史の見方を分析対象として作業をひたすらメタ化させていく、との警鐘も鳴らされた。

松本和也氏は、論争史を切り口とする文学史への展開例としていわゆる「文学非力説」論議について概念枠を様々にとり、多層的再考の方法を示した。論争の中心となったテクストのみならず同時代評、作家情報、文学無力説の系譜、広く同時代に議論された諸問題との交差の関連づけが求められるという。この時代の言説が文字通り読まれないことからその位置づけは難しく、参照項をより多く立て、理解の妥当性を上げたい、と総括した。

中谷いずみ氏は、平野謙の言説を批判の糸口とし、既成の文学史が感知し損ねてきたものに注目する立ち位置から、従来のプロレタ

リア文学史の枠に収まらない雑誌『女人芸術』に着目した。特に藍川陽「生活の感傷」のハスキーパーをめぐる読み直しを通じ、運動では不可視化され、当時のプロ文批評でも理解不能とされた闘争現場の女性像を分析し、今の文学史がこうしたものを位置づけられるかその枠組みを問い続けるべき、とまとめた。

大澤聡氏は、文学が力を持ち、且つその存在意義を問われたこの時代の諸事象を、歴史感覚の希薄な現在に、いかに接続させていくか、視野を広げる方向で四氏に問いかけた。会場からも、世界文学の視点からの考察も必要では、との提案があった。議論が交差しなかったことから、大澤氏は学問史・学説史の共有の必要性を指摘。大きな議論を極力避けてきた私としては虚を衝かれる思いがした。ただ今回のように個々の研究方法が確立・完結しているほど、その共有も難しくなりそうだ。来聴者にとっては、四つの方法事例と最後の問題提起を前に、あらためて自身の領域の役割分担の意義を問い返す機会となったことだろう。個人的には、中山・中谷氏により新たな文学史的知見を得た一方、〈書かれな

にする安藤・松本氏間でのやりとりを聴きたいと思った。こうした論点の蓄積もまた新たな文学史を形作っていくはずである。

文学史は本当に多様化したのか

日 比 嘉 高

冒頭、司会の次のような提起で始まった。正史としての〈大きな文学史〉は多様な文学史へと転換を果たしたが、そこで文学史が共有されないとこの事態がおこった、いまこそ〈ポスト文学史〉の議論をするべきではないか。一人目、中山弘明の報告「明治文学談話会」と文学史——〈学問史〉の視点から——は、明治文学談話会の活動とその意義をめぐる語り、神崎清の言論に注目しながら分析した。同会が講座派的な唯物史観にもとづく問題意識を有したことを明らかにし、文学史の歴史記述が行われる際に、政治思想や党派性などが介在したことを指摘した。

安藤宏の報告「文学史は表現に内在する」は、〈重箱の隅〉という喩えを用い、文学史

の座標の原点を見出すことの重要さと、そこから出発する文学史的展望の可能性を説いた。年表や資料集など外的なものから迫るのではなく、表現に内在する文学史を、という訴えであった。

松本和也の報告「文学非力説」論議の位置・意義「圏域」は一九四〇年代の「文学非力説」論議を検討した。評論の言説そのものだけでなく、関連する諸要素を重層させることの大切さを強調したが、分析と論述は中途で終わったという印象だった。

中谷いずみの報告「空白の「文学史」を読む——政治と文学」にみるジェンダー・ポリティクス」は、雑誌『女人芸術』のあり方の特質を考えながら、藍川陽「生活の感傷」におけるハウススキーパーの表象を掘り上げた。同誌の型にはまらない開放性こそが、感しづらいものの表象を呼び寄せ得たと評価した。

デイスカッサントの大澤聡は、一九三〇年代に注目する意義を平野(謙)史観の再検討、政治と文学(の終焉)の問題、客観性の偽装への警戒などから整理しつつ、フラット化した現在の状況にどのような時間軸を再導入す

るかという問題提起へとつないだ。会場からは、議論があまりに「日本近代文学」の中に内閉しているのではないか、世界文学や東アジアの視点を欠いていないか、という批判的な問い掛けがあったが、登壇者はいずれも明確には回答しなかった。

私の感想は三つある。一つは、既存の「枠」からはみ出すものにどのように気づき、呼び入れていくか。中山はそれを「談話」を聞くことと、雑多な問題に取り組む神崎清の個性とから論じた。中谷は『女人芸術』という場の「ゆるさ」に意義を見出した。関係者の個人的だが別様（オルタナティブな）の論理をもつ談話や、領域横断的に広がる文学者のエクリチュール、開放的な雑誌編集方針などが、従来のな枠取りの外側へ私たちを連れて行く可能性をもつわけだ。

二つ目だが、文学史を再論するという課題を考えるにしては、今回の議論はあまりにも現代歴史学が行ってきた歴史叙述の理論的考察について目配りを欠いていた。歴史の多様性・多層性を汲み上げようと苦闘する歴史学の挑戦から、文学史（研究者）は多くのことを学べるはずではないか。

最後に大澤の言っていた「学説史」の必要性に、私も同意する。初学の学生たちにだけでなく、私たちの自己確認の意味でも、である。私たちの文学史は本当に多様化したのかの点検にもなろう。

秋季大会研究発表の記録

(当日にタイトルが変更された場合は、原則として*を付し、変更後のタイトルを記した。)

二日目

第一会場

〔個人発表〕

夏目漱石の『それから』と『自己卓越』

——『文学論』の(悲劇論)を中心として

朴 珍 娥

森三千代の『病薔薇』における日中女性同士の繋がり

——「自由」・「愛」・「夢」のために(*)

楊 佳 嘉

〔√1〕の存在論

——夢野久作『木魂』の怪奇表象

加藤 夢三

(司会) 金ヨロン・堀井一摩

〔パネル発表〕

「他者」と共同性

——戦後日本のスピリチュアリティ表象——

木下幸太・加島正浩・泉谷 瞬

(デイスカッサント) 柳瀬善治

(司会) 帆苅基生

第二会場

〔個人発表〕

一九六六年遠藤周作『沈黙』から一九七〇年大阪万博への道程

増田 斎

中上健次「火宅」における同一性をめぐる語りと父の形象

消えていく(記憶)に接触すること

——目取真俊「群蝶の木」論——

亀有 碧

(司会) 金子亜由美・康 潤伊

〔パネル発表〕

「文化資源」としての『伊豆の踊子』

——小説・映画・文学碑——

西山峰龍・今井瞳良・藤田祐史

(デイスカッサント) 仁平政人

(司会) 安西晋一

〔個人発表〕

山川登美子の目覚め

——『花のちり塚』裏表紙不明文字の判読から——

前田 敬子

〔小説作法〕の生まれる場

——明治期における小説作法書の成立——

山本 歩

〔小説〕というメディア

——徳富蘆花の「小説の小説」論——

(司会) 鬼頭七美・落合修平

〔パネル発表〕

文学研究と言語研究のインターフェイス

橋本陽介・西田谷洋・中村三春・浜田 秀

(デイスカッサント) 小澤 純

(司会) 服部徹也

第四会場

〔個人発表〕

戦前・戦中期の『少年倶楽部』における海外児童文学の受容

森下 達

司馬遼太郎『坂の上の雲』論

——雑誌『中央公論』をめぐって——

村山 龍・村上克尚

(司会) 村山 龍・村上克尚

〔司会〕 村山 龍・村上克尚

藤原 麻美

前田 敬子

【研究発表の記録（第一会場・個人発表）】

朴珍娥氏の発表は、夏目漱石『それから』

を『文学論』の〈悲劇論〉を参照しながら読み解こうとするものであった。漱石は、観客が主人公の冒険や精神的成長をまるで自分の成長のように感じる（自己卓越）を悲劇の要件に数えたが、『それから』ではこの原理を変型し、観客が主人公の代助ではなく、自分の能力から喜びを感じるように構成したことが指摘された。会場からは、朴氏の依拠する読者概念の曖昧さや、『文学論』を援用する根拠をめぐって質問が提出された。

楊佳嘉氏「森三千代の「病薈薇」における日中女性同士の繋がり―「自由」「愛」「夢」のために―」では、一九二〇年代末、森三千代と白薇（薈薇のモデル）という二人の日中女性作家の交流の経験から生まれた「病薈薇」が詳細に分析された。そこでは、男性（郭）によって性的放縦を象徴するものとされた薈薇の「病」が、自由と愛と夢のために苦悩する女性たちの表象へと、再意味化される過程

が鮮やかに描かれていた。会場からは、小説が実際の経験から時間を隔て、異なるコンテクストの中で発表されたこと（一九四六年）の意味や『桃源』というメディアについて質問がなされた。

加藤夢三氏の発表は、夢野久作「木魂」における怪奇出現のメカニズムを、同時代の数学教育論を参照しながら探るものであった。

夢野は、数学教育論における論理主義が抱えていたアポリア、すなわち、演繹的かつ抽象的な記号操作としての数学が日常の経験から切り離されているがゆえに理性の根拠が保証されない、というジレンマを創作原理に昇華し、合理に内在する非合理を不気味な「声」の幻聴として描き出していることが指摘された。会場からは、狂気の表現形式や、同時代の自己言及性のあり方について質問が提出された。

運営委員（金ヨンロン・堀井 一摩）

【研究発表の記録（第一会場・パネル発表）】

日本におけるスピリチュアリティ言説は、

オカルトや精神世界への関心、そして伝統回帰の文脈の中で言及されてきた。しかしスピリチュアリティには、何らかの「他者性」に触れることによって潜在的な自己を解放し、「個」を超えて「他者」と連携する可能性を持つものとして、従来の共同体や人間関係を問い直す契機を与えるものとしても捉えられている。本パネルはこれを踏まえて、戦後の日本の社会的文脈の中で、各時代における展開を文学・映像表現を対象に問い直すものがあった。

木下幸太氏「映画『モスラ』のスピリチュアリティ」は、一九六一年に公開された特撮映画『モスラ』が、同時代の日本関係や原水爆の脅威に対する批評性を持ち得ていたことを指摘した。オカルトや精神文化に代表される新霊性文化が興る一九七〇年代以前の「モスラ」に現れるスピリチュアリティは、現実社会を相対化するオルタナティヴであり、現

実からの救済を想起させるものであり、国家の政治的暴力という「神話的暴力」に対して、モスラはそれを無化する「神的暴力」として捉えることができると論じた。

加島正浩氏「天皇なき鎮魂の空間へ―荒俣宏『帝都物語』における「他者」性の再編」では、一九八〇年代に発表された『帝都物語』において、東京が怨霊が跋扈する「異界」にされることで、「天皇」によらない鎮魂の空間」として描かれることになったと指摘した。新靈性文化がバブル経済の消費文化の中で流通していく一九八〇年代は、資本主義の成長を維持するための国家主義的体制の強化と天皇制の「復権」が企図された時期でもあった。そこで『帝都物語』は、東京を「異界」とすることで、天皇の行う鎮魂にだけ集約されることがない、まつろわぬ民を含めた多様な「他者」性を受け止める鎮魂の空間にして相対化することを可能にしたと論じた。

超現実やスピリチュアリティに関心を寄せていることがうかがえる津村記久子作品を「サイガサマのウィッカーマン」を中心に考察した。手を挙げて挨拶するという自己の身体的行為は、他者の身体が応答することで初めて成立するものであり、この「自己完結しない身体性」こそが、「他者性」に触れることで自己を解放することになるというスピリチュアリティが示されていることを明らかにした。

増田斎氏の発表では、『沈黙』によって、キリスト教会の一部から批判を受けたはずの遠藤が、大阪万国博覧会に出展されたキリスト教館のプロデューサーの一人として拔擢されたことの意義が、批判的に検討された。そして、キリスト教側が、大衆伝道という目的のため、『沈黙』を書いた遠藤の未信者への影響力を利用した一方、遠藤もまた、大衆への布教を意識した結果、キリスト教館という場を利用したとの指摘がなされた。会場からは、『神の痛みの神学』を書いた北森嘉蔵と遠藤との関連を問う質問などがなされた。

運営委員（帆布 基生）

亀有碧氏の発表は、『火宅』における語りを、物語世界外にいる語り手の語り―物語世界内に発生する伝聞をもとにした語り―聴き手という関係に分け、この関係が、焦点人物の（彼―「母の家」と呼ばれる母子の空間―実父の三者関係と照応していることを明らかにした。そのうえで、先行して語る者に対する従属を脱する場としての聴き手を見出した。会

【研究発表の記録（第二会場・個人発表）】

場からは、兄の役割や、聴き手の場は男性ジェンダー化されているのではないかという質問、そして家に火をつける男の行為は語りの構造とどのように関連するのかについて質問がなされた。

栗山雄佑氏は、「群蝶の木」を扱い、慰安所を設置した日本軍の論理を明らかにし、ゴゼイの記憶が理解される素地が部落から失われていることを指摘したうえで、ゴゼイに接触する義明の行為に着目し、この行為は、過去の記憶を理解できないことを、自己の問題として考える契機であったと結論づけた。会場からは、遊郭から集められた女性たちが慰安所に送られたとする資料の根拠について質問がなされ、さらに発表においてゴゼイが客体化されてしまっているのではないかという指摘をもとに、結末部の解釈について議論が行われた。

運営委員（金子亜由美・康 潤伊）

【研究発表の記録（第二会場・パネル発表）】

本パネルは、川端康成『伊豆の踊子』が、推理小説、映画、文学碑・文学像において「資源化」されていく過程に注目し、そのなかでも特に観光との関連性に焦点を当て、現象としての文学作品を主に検討するものであった。

藤田祐史氏「『伊豆の踊子』にとつて推理小説とは何か——カノンとミステリ」は、松本清張『天城越え』を中心に、推理小説における『伊豆の踊子』の資源化を検討したものである。特に、天城峠という場は、トラベルミステリでは事件の現場という形での利用が見られるとする。さらに、推理小説の型として生成される、殺人事件の「犠牲者」としての踊子像は、「死後の生」（ベンヤミン）という観点から読み直すとき、川端の『伊豆の踊子』に既に内包されていたという。推理小説というジャンルにおいて、多様に交錯する『伊豆の踊子』資源化を紐解く発表であった。

今井瞳良氏「映画『伊豆の踊子』が描いた旅」は、映画『伊豆の踊子』に描かれた「旅

の場面に着目し、観光との関連から原作が文化資源として利用されていく過程を考究した。自然の風景を活かした小唄映画の系譜から検討が行われた本発表では、そのなかで『伊豆の踊子』が、原作として「発見」されていたとする。そして、望遠レンズやワイドスクリーンの使用による風景（旅）のシーンの増加に伴い、「発見」された『伊豆の踊子』は、観光の文脈に合わせた、伊豆を表象する作品になっていったとする、資源化のプロセスが指摘された。

西村峰龍氏「文化資源としての文学碑——文学碑から文学像、そして拡散する「踊子像」へ」は、『伊豆の踊子』関連の文学碑・文学像を踏査し、拡散されていく踊子のイメージを中心に考察した。各地に建立された『伊豆の踊子』の文学像は、小説内では描かれていない、踊子を見詰める学生といった構図が取られ、さらには、踊子一行や学生が歩いている道にも立像された例もあるという。また、踊子のみの像などが各地に設けられ、原作を離れた踊子のイメージが観光資源化され、拡散されているとする発表であった。

デイスカッサントの仁平政人氏は、「文化

資源」論という三者の試みを評価しつつ、文学作品の文化的利用、価値の再生産を、諸力を交錯させたイメージとして捉え、討議の端緒とした。質疑応答では、こうした文学の再活用（リサイクル）に対して、文学研究が、どのようにして批評的に関わっていくべきかという、非常に大きな課題が問われた。

運営委員（安西 晋二）

【研究発表の記録（第三会場・個人発表）】

前田敬子氏の発表は、山川登美子の自筆稿本『花のちり塚裏表紙の不明文字を判読し、この歌稿が従來說より早い明治三十三年に書かれたことを明らかにした。同時に、この歌稿が随時書き継がれ、徐々にその筆録態度が変化していく様をも明らかにし、登美子の歌人としての精神の独立や歌に生きる覚悟を指摘した。会場からは、変体仮名の読み取りについての確認や、表紙・裏表紙・本文等を断片的に読み取る論者の方法についてトータルに捉えるべきではといった質疑がなされた。

山本歩氏の発表は、明治期における小説作法書について、「文範集」との関連の下に成立過程を示しつつ、その特質を考察した。文章作法書において地方語、方言が否定的に扱われるのに対して、落合浪雄や田山花袋らの小説作法では逆にその活用が説かれていることが指摘され、実地の経験の重要性を説く生田長江の主張などと合わせ、明治期の小説作発言説に、既存の美辞を拾うような閉鎖性に対し、異質な外界との接触への志向が認められると論じられた。会場からは、方言の使用と自然主義言説との関わりや、研究の展望について質問があった。

権丁照氏の発表は、原作者不詳の徳富蘆花による翻訳「小説の小説」を取り上げ、これがちに植民地朝鮮で「物語の物語」と「帰去来」という二つの更なる翻訳となつて現れたことに注目するとともに、病身の作者が妻に口述筆記させ、それが読者を獲得していく様を描く内容であることにも注意を向け、小説の書き手から読者へとメッセージが受け渡されるコミュニケーションとトランスポーターションの有り様について論じるものであった。会場からは、朝鮮での翻訳が蘆花のものに依拠しているのか、蘆花が見た原作そのものに依拠しているのかなどについて質疑がなされた。

運営委員（鬼頭 七美・落合 修平）

【研究発表の記録（第三会場・パネル発表）】

本パネルは、言語研究の成果から文学研究を問い直すとともに、言語芸術の参照により言語学の射程を広げ、新たな知見を創出する試みである。まず、デイスカッサントの小澤純氏が導入を務めた。八〇年代に始まる記号論、物語論等の「言語論的展開」を、雑誌『国文学』の知の最前線シリーズを材料に振り返り、言語研究が批評や国家論と繋がる一方、詩学と遠かったことなどの課題を指摘し、最近の動向として虚構の枠組みを問い直す『早稲田文学』二〇一七年初夏号を紹介した。

最初の橋本陽介氏は「物語における時間と語法——日本語からのアプローチ」と題し、読みに理論を導入するだけでなく理論自体を創る必要性と、言語学と文学研究の交点「語

文学」の再評価を提示した。文末の時制タ形とル形の使い分けから書き手の認知を分析し、「語りの位置」が物語外にあること、タ形が物語現在の時間を進める役割を持つことや、動作反復や持続を示す「ル」形などを指摘した。印象に寄りかかった「テキスト分析」ではなく文法を参照する重要性にも言及した。

続く西田谷洋氏の「時空間メタファーとパスベクトタイプ」は、言語構造は認知の反映という把握を明確化した上で、認知言語学により村上春樹のメタファーを考察した。身体感覚や情動を伴った、現実と仮想の写像関係を春樹のメタファーの鍵として捉え、自分の動きが対象の動きに置き換わる時空間認知に注目。「騎士団長殺し」の「二重メタファー」を、時空間認知の二重性と、その過程で立ち上がる新たな「現実」と関連付けて論じた。

中村三春氏の報告は「語り手・人称・主体と複合的小説構造」である。複合的小説構造とは、長篇小説や連作短篇集で、語り手や焦点人物が部分ごとに変わるものを指す。人格ではなく「引用の織物」の中での媒介構造・語る機能としての語り手に着目し、語りの「統一」を志向するテキスト研究を批判的に見直

した。そして言語学の話法の知見から、他人の発言を取り込みやすく、他の主体と容易に重なる日本語の語りの形態を説明し、引用と同時に生成するテキストという見方を示した。

最後に浜田秀氏が「詩」の発生・「詩」の消滅——ジャンル名から見えるもの」を報告した。初めに言語行為論を参照し、雑誌目次等で詩、小説などのジャンルが示されることで、そう見なすという「制度的事実」が創出されることを確認した。そして国会図書館デジタルコレクションをコーパスとし、「漢詩」「新体詩」などのジャンル名の付与傾向を調査し、「詩」の認知的な語義変化を分析した。

小澤氏は人間の認知への着目と議論の普遍化との関係や、パネルの問題意識を文学教育実践に接続させるコメントなどを行った。質疑応答では、橋本氏の文法からの分析は、短歌など小説以外にも敷衍できるのかや、西田谷氏の身体性と結びついたメタファーは焦点化の問題にも応用可能かなどが問われた。

運営委員（橋本あゆみ）

【研究発表の記録（第四会場・個人発表）】

森下達氏の発表は、一九二〇～三〇年代の『少年倶楽部』で「家なき児」などの「孤児」をめぐる作品が多く掲載されていたことを指摘し、「無垢な子ども」を通じて美德を象徴するといった一九世紀的なメロドラマの構造が戦前・戦中期の日本の児童文化に浸透していたとするものであった。会場からはメロドラマという構造で読み解く必然性への質問や、「孤児性」がメディアの中で消費されるときには多様な読まれ方があったのではないかという質問などがあった。

轟原麻美氏の発表は、司馬遼太郎『坂の上の雲』の歴史観に、林房雄、上山春平、大井魁らが『中央公論』誌上で展開した大東亜戦争をめぐる言説からの影響を指摘したうえで、司馬独自の見解がどの点にあるのかを探ろうとしたものだった。会場からは、「中央公論」のみに調査対象を絞るのではなく、同時代の歴史学研究会の言説などにも目配りしなければ司馬の位置は見えてこないのではな

いか、発表者が「司馬史観」に対してどのような位置を取っているのか明確にすべきではないか、といった質問が出された。

運営委員（村山 龍・村上 克尚）

会員の皆様へ

○海外在住会員について

海外に在住されている場合、海外在住会員として申請して頂ければ会費は半額となります。通常会員から海外在住会員への変更、または海外在住会員から通常会員への変更の際には、渡航前にご連絡下さい。変更の届け出より前の海外在任期間中の会費減免には応じられません。また、くれぐれも住所変更等のご連絡を忘れないようお願い致します。

なお、海外への住所変更のご連絡は、海外在住会員への変更届けとして扱わせて頂きます。

○退会時の会費滞納について

近年、会費滞納のまま退会される事例が増えていきます。退会時には会費の滞納がないか御注意下さい。滞納が続けば自動的に退会とはなりますが、退会されても滞納の未払いは存続します。退会の際は滞納分をご精算下さいますようお願い致します。

○会員、会費に関する諸連絡先

お茶の水学術事業会

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学理学部三号館二〇四号室

お茶の水学術事業会内「日本近代文学会」係

一 一月例会研究発表の記録

(当日にタイトルが変更された場合は、原則として*を付し、変更後のタイトルを記した。)

第一会場

〔パネル発表〕

村上春樹「騎士団長殺し」

——(メタ・テクスト)性と「物語」の

その先——

内田 康・Dahni Katalin・山根由美恵

・平野芳信

(デイスカッサント) 跡上史郎

(司会) 生方智子

〔個人発表〕

福田恆存『キテイ台風』論

——「饒舌」という試み——

古田 高史

憑依する二人称

——ロシア語版『金閣寺』の翻訳法——

村上 智子

(司会) 安西晋二

第二会場

〔パネル発表〕

タイからのまなざし／タイへのまなざし

——日本近代文学をめぐる受容状況——

久保田裕子・ナムティップ メータセート

・タナポーン トリラツサクルチャイ

(司会) 村上克尚

〔個人発表〕

「雨二モマケズ」と「北国農謡」

劉 春燕

詩誌『MADAME BLANCHE』対『樵の木』

のスキャンダル

崔 世卿

(司会) 能地克宜

第三会場

〔個人発表・午前〕

台湾における啄木文学の受容と継承について

——日本統治期新聞及び雑誌にみられる記事を中心——(*)

劉 怡臻

劉 怡臻

戦時下における石川達三の「戦争協力」

——資料(計一三五点)から

見えてくるもの——(*)

呉 惠升

東京裁判と戦後日本文壇の南京大虐殺表現

陳 童 君

(司会) 橋本あゆみ・金ヨロン

〔個人発表・午後〕

朝鮮語と日本語の間の「近代」

——鄭芝溶論——

金 東 偉

移動と創作言語から見る金史良の生成

——北京への「漫遊」と日本への「密航」を

めぐる二言語の随筆を中心に——

高橋 梓

(司会) 康 潤伊

第四会場

〔個人発表・午前〕 午前

折口信夫の小説『神の嫁』をめぐって、近代

文学について再考する

SPOEHRLE MACHA

テクストの不可能性 可能性のテクスト

——前田愛『文学テクスト入門』再考——

安住 紀宏

(司会) 堀井一摩

〔個人発表・午後〕

Nagai Kafu *La Sumida* から永井荷風

『すみだ川』へ

南 明日香

日本近代文学と芸能におけるモルナル受容

Forgo Teodora Maria

(司会) 落合修平

〔講演〕

海外の日本近代文学研究、その条件、アポリアと可能性

— フランスの場合

坂 井 セシル

これまで国際研究集会は、第一回が二〇一三年に日本大学で、第二回が二〇一五年に早稲田大学で開催された。今回は、第三回として立教大学での開催となり、パネル発表や研究発表のほかに、最終プログラムとして講演会を設けることとした。各会場での個別の発表を終えたあと、全体で集まる企画としては初めての試みである。

講師として、本学会評議員であり、パリ・デイドロ大学東アジア言語文化学部日本語科教授、二〇一六年九月より日仏会館フランス事務所・フランス国立日本研究所所長である坂井セシル氏をお招きした。坂井氏は、パリでの川端康成展や江戸川乱歩展の実績を具体例としながら、谷口ジローなどの漫画やアニ

メの絶大な影響力も含めてフランスで日本文学や日本文化がどのように受容され研究されているかという状況から始められた。そして、沼野充義、加藤典洋、西成彦ら、リービ英雄、池澤夏樹、多和田葉子らによる越境批評言説の現状について、世界文学という観点からも

今後の日本近代文学研究を開いていく可能性あるものとして詳述された。また、日仏近代文学研究の非対称な関係として、たとえば、

アメリカからのカルチュラルスタディーズ、ジェンダースタディーズ、ポストコロニアリズムスタディーズといった分析理論は、フランスでは必ずしも広範には浸透していないこと、ひるがえってむしろテクスト論的理論研究が依然として強力であるとのことである。しかし、近年、若い世代がジェンダー分析による研究を進展させるようにもなっているということ、フランスでは日本近代文学研究の博士指導教員が四名のみという実情なども含めて、日仏の違いのレポートが興味深く思われた。さらに、比較文学や地域研究としての日本文学研究を推進して世界文化遺産へという道筋に、聞いているこちらでも啓発され、若い研究者を育てていくこうとする未来への展望を

語られる坂井氏の講演は、まさに国際研究会にふさわしいお話であった。ご講演くださった坂井セシル氏に改めてお礼を申し上げます。(運営委員会)

〔研究発表の記録(第一会場・パネル発表)〕

二〇一七年二月に出版されたばかりの村上春樹の長編小説『騎士団長殺し』(第一部「顕れるイデア編」第二部「遷ろうメタファー編」)を取り上げ、海外を拠点とする研究者や外国人研究者をパネリストに加えて、多彩な発表者によるそれぞれの切り口から村上春樹文学の国際性について検証が試みられた。

まず、台湾の淡江大学・村上春樹研究センターに所属されている内田康氏により、台湾における村上春樹文学の盛んな受容が報告された上で、『騎士団長殺し』は、「私」を主人公とする〈父殺し〉の物語、つまり、〈父なるもの〉と対峙し、「邪悪なる父」の存在を認めることによつて象徴的な〈父殺し〉を果たし、最終的に「父」になることを受け入れ

る物語であると読み解かれた。次に、ハンガリー出身の Dalmi Katina 氏により、ハンガリーにおいて村上春樹の作品が多数翻訳され、村上文学は不思議な体験をリアリズムの文体で描く「魔術的リアリズム」として受容されていることが報告された。また、Dalmi 氏は、『騎士団長殺し』に登場する様々な絵画が、ドイツ・ワイマール共和国における美術運動「ノイエ・ザハリヒカイト」の中で発表された「マギツシャー・レアリスムス（魔術的リアリズム）」の絵画に類似しているという想定の上に、『騎士団長殺し』はヨーロッパの歴史的問題を見据えた上で、それを個人の内なる「悪」の問題として描き出した作品であると論じた。

前半の発表が〈父殺し〉や「影」との遭遇の物語といった〈大きな物語〉に言及したのに対して、後半は〈大きな物語〉を脱構築する発表となった。まず、山根由美恵氏により、パネルのテーマである「メタ・テクスト」という用語の意味内容について「小説内部で文学史上の先行作品からの引用が織り成され、批判的再創造が行われること」という定義が確認され、『騎士団長殺し』は、これま

での村上文学に対して自己言及的な〈メタ・テクスト〉の方法を採用しているという観点提示された。さらに『騎士団長殺し』の〈メタ・テクスト〉性こそが物語の構造化を阻み、その結果、「影」「闇」の描かれ方が曖昧となつて、作品から批評性が失われてしまったと述べられ、従来の村上春樹研究と批評のあり方を問い直すべき時がきたと結論付けられた。対して平野芳信氏が、『騎士団長殺し』の語りの方法を「境界線上の語り」（マージナルナレーター）であると定義し、一人称の語りという方法に内在化している亀裂を利用し、語り手の「私」と主人公の「僕」として差異化することによって、両者に備えられた情報量の差異を顕在化させていくという方法が実践されていること、その結果『騎士団長殺し』は「話型的なもの」から解放されていると論じた。最後に、デイスカッサントの跡上史郎氏のナビゲートによりフロアとの間で活発な質疑が生まれ、村上春樹の小説技法やテーマ設定について議論が重ねられた。

運営委員（生方 智子）

【研究発表の記録（第一会場・個人発表）】

古田高史氏は、福田恆存「キティ台風」における「饒舌」という試みを、言葉（台詞）の能動性による作劇法とした。登場人物が、自ら発した言葉により、思いがけない結果へと導かれていくという様態を、台詞の能動性と捉え、このような言葉を中心とした物語の展開、人間関係の生成は、自然主義的なりアリズムの克服をも内包する、福田戯曲の新しさであると論じられた。質疑では、チェーホフに対する福田の意識や、劇場・俳優といった舞台との関連性などについて問われた。

村上智子氏は、チハルチヴィリの翻訳によるロシア語版『金閣寺』の登場人物について、ドストエフスキー『悪霊』の登場人物との重なりを始点に論究した。本作の翻訳に見られる人称代名詞の使用に着目した村上氏は、そこに、柏木から溝口へという上下関係の強化から、「われわれ」を用いた、柏木が溝口に見せる憑依的な語りへの変化があると、二者関係の前景化は、思想の不条理性を

あぶり出すとして、さらに、ロシアの同時代的な情勢へと接続した。会場からは、他の登場人物との関係や、ロシアでの男性同士の問題などが質問された。

運営委員(安西 晋二)

【研究発表の記録(第二会場・パネ ル発表)】

本パネルは、日本の近代文学においてタイはどのように表象されてきたのか、またタイにおいて日本の近代文学はどのように受容されてきたのかを、相互照射的に明らかにしようとする場として設定された。

久保田裕子氏の「日本近代文学の中のタイ表象」では、戦前・戦中・戦後と、日本におけるタイの表象がどのように変化してきたのが論じられた。戦前は、南進論の文脈で「山田長政」の名を象徴的に用い、少年たちに帝國主義的な欲望を植えつける記事が多く見られる。さらに戦中は、三井物産の雑誌に、着物姿のミス・タイの写真が掲載されるなど、日タイ関係がジェンダー化されて捉えられ

た。戦後は、日本企業による経済進出の文脈でタイの表象が生産されるが、それは南進論の反復と言えるものであり、例えば遠藤周作『王国への道——山田長政』にはこのような同時代への批判的意識が表われている。また、七〇年代以降の売春観光についても、タイに「癒し」や「再生」を求めるオリエンタリズム的な言説との類似性が指摘された。

ナムティップ・メータセート氏の「タイにおける日本文学を受容——芥川文学のアダプテーションを事例に——」では、戦後のタイにおける日本文学を受容と、ククリット・プラモートによる芥川龍之介「藪の中」のアダプテーションが論じられた。日本文学を受容については、五〇年代から七〇年代の導入期(純文学中心)、八〇年代から九〇年代の教養期(「日本に学ぶ」式のもの)、二〇〇〇年代のポップ文学・ホラー小説ブーム(吉本ばなな『キッチン』、鈴木光司『リング』)といった時期を経て、現在は「文豪ストレイドッグス」や「文豪とアルケミスト」の人気を受けて、著作権が切れた純文学作品が小さな出版社から刊行されつつあることが紹介された。そのうえで、この状況が、かつてククリットが映

画『羅生門』の衝撃から「藪の中」を翻案し、その後も多くの「藪の中」のアダプテーションを生んでいることと相似的であることが論じられた。

タナポーン・トリラツサクルチャイ氏の「サンコムサート・パリタット」における日本文学の翻訳と受容について」では、タイの知識人向け総合誌『サンコムサート・パリタット(社会科学評論)』に翻訳された日本文学作品の意味が論じられた。同誌では、日本の経済進出を批判する立場から、何度か「黄禍特集」が組まれ、その際には日本文学の翻訳も掲載された。このうち、七四年三月号の特集を確認すると、日本の軍産複合体への懸念の記事とともに三島由紀夫「憂国」が掲載され、日本企業による環境汚染の告発とともに石垣りんや砂田明の詩が紹介されていることが確認できる。そのうえで、このラインナップが、同時期の国際交流基金による日本文学の紹介とは異質であること、また作品の選定にあたっては在日タイ人留学生の協力が大きかったことが言及された。

会場からは、東アジア文学とは異なる、日本と東南アジア文学との関係について明確に

してほしい、日タイの二者関係のみならず、そこに介在している西洋世界との重層性に於いてどう考えるかなど、活発な質疑が行なわれた。

運営委員（村上 克尚）

【研究発表の記録（第二会場・個人発表）】

劉春燕氏は、宮沢賢治「雨ニモマケズ」を中国語に最初に翻訳した錢稻孫の「北国農謡」（一九四一年）に着目し、日本での生活経験のある錢稻孫を先行研究に基づき紹介しつつ、その翻訳が中国詩のリズムや特徴に合わせて意訳を試みており、中国の読者に賢治の主張を届き易くしたものであることを指摘した。会場からは、その翻訳の、戦時下における中国東北地方の農民に対する日本の戦略的側面をどう意味づけるか、今日においてもこの「北国農謡」が「雨ニモマケズ」の優れた翻訳であるとする理由は何かなどの質問があった。

崔世卿氏は、共に昭和七年に創刊した詩誌

『MADAME BLANCHE』と第三次「椎の木」に着目し、昭和八年五月号に掲載された北園克衛の『詩抄』批評を発端とした両誌同人による論争の過程を詳細に辿ることで、双方の若手詩人がこの論争によって次世代の詩人として成長していったことを指摘した。会場からは、両誌の対立葛藤がもたらした近代詩、現代詩への展開をふまえ、両誌が同時代に果たした役割をどう捉えるか、また、両誌同人が一部重複していることや移籍が論争にどう関わっていたのかなどの質問があった。

運営委員（能地 克宜）

【研究発表の記録（第三会場・個人発表・午前）】

劉怡臻氏は、日本統治時代の台湾において、当初は日本人により新聞等で紹介された石川啄木が、特に三行書き短歌に関して、台湾人文学者に独特の形で受容されたことに着目した。社会諷刺や貧困生活を詠む「啄木調」を、台湾の文学者が植民地台湾で目指すべきリアリズム表現と結びつけて語った傾向について、

「台湾日日新報」や各種雑誌の調査から論じられた。質疑では、雑誌広告等での啄木の紹介の状況のほか、啄木を受容した上で民族的アイデンティティなどの独自要素を導入した、王白洲ら台湾歌人の日本語短歌自体の評価を期待する声があった。

次の呉恵升氏の発表では、一貫して戦争に「庶民的な抵抗」をしたという石川達三評価に疑義が呈された。日本文学報国会員としての言論活動の検討のほか、新出資料として中国で刊行された『婦女雜誌』への寄稿「寄中国女性」（訳者不詳）を紹介し、文中で大東亜共栄圏思想への強いコミットを指摘した。質疑では、戦争協力した他の文学者と異なる特徴はあるのか、「生きてゐる兵隊」の筆禍事件での執行猶予が言論に及ぼした影響、読者受け志向という点で戦後の石川の活動と関連づけられないか、などの問いが出た。陳董君氏の「東京裁判と戦後日本文壇の南京大虐殺表現」は、石川達三「生きてゐる兵隊」から始まり、東京裁判における南京事件の記述をきっかけに大きく変化していく南京虐殺の表現史を追跡した。南京虐殺をどのように描いてきたのかという観点から戦後日本

文学の歩みを振り返る議論は、堀田善衛の『時間』、榛葉英治『城壁』などの具体的な考察に及んだ。会場からは、東京裁判が明らかにした日本軍残虐行為の中で特に南京虐殺に焦点を絞って表現空間を考察した理由や堀田善衛『審判』、『夜の森』の位置づけ、中国語の翻訳に関する質問等がなされた。

運営委員（橋本あゆみ・金ヨシロン）

【研究発表の記録（第三会場・個人発表・午後）】

金東傳氏の発表は、植民地期に朝鮮語と日本語で創作したモダンリズム詩人・鄭芝溶の近代性について考察したものである。彼が詩を載せていた雑誌媒体や交流関係についての調査および、実際の詩におけるイメージや表記についての分析を通して、鄭芝溶を近代文学語としての朝鮮語を発掘した詩人であると結論づけた。会場からは、雑誌媒体の具体的な性格や、鄭芝溶の詩における漢語と朝鮮語の関係、検閲の問題、二言語を使い分けることによる葛藤、そして彼の階層性などについて

質問がなされた。

高橋梓氏は、金史良が本格的に作家活動を始める前に経験した二つの移動（北京滞在と渡日）を朝鮮語と日本語で綴った随筆について考察した。そして金史良が二つの移動経験を朝鮮語から日本語で書くことよって、植民地期において日本語が朝鮮語にもたらず影響と、日本における朝鮮人移住者のあり方に意識的になっていったことを明らかにした。会場からは、中国における朝鮮人の屈折した立場や、「敗残兵」や「密航者」が持つ可能性、ペンネームと本名の使い分けが二言語での創作に与える影響などについて質問がなされた。

運営委員（康 潤伊）

【研究発表の記録（第四会場・個人発表・午前）】

スポーレ・マーシヤ氏の発表は、折口信夫の小説「神の嫁」を折口の巫女論をもとに読み解くものであった。「神の嫁」において神と巫の交合を巫の心理状態や身体感覚を交えて描き出すことで、折口は巫女という民俗学

の概念を具体化し、学問の限界を乗り越えようとしていたことが指摘された。会場からは、折口の文学における音・声の重要性が「神の嫁」に現れているのかという質問や、「近代文学について再考する」というタイトルの意味、小説が未完に終わっていることの意味をめぐる質問が提出された。

安住紀宏氏の発表は、前田愛『文学テクスト入門』において「テクスト論」のアポリアと可能性とを同時に別出しようとするものであった。『文学テクスト入門』は、テクスト論を標榜しながら作家の意図を召喚してしまふという矛盾を抱えており、これがテクスト論の原理的な問題として指摘されると同時に、それ自身が様々なテクストの交差する錯綜体と化すことでテクストを実践していることが指摘された。質疑応答では、作者に遡行しない読みの実践としての注釈や錯綜体の概念をどう評価するのかという問題をめぐって活発な議論が展開された。

運営委員（堀井 一摩）

【研究発表の記録（第四会場・個人
発表・午後）】

南明日香氏の発表は、永井荷風『すみだ川』における風景描写に、歌川広重や小林清親の名所絵を重層的に読み取った海外の研究者（ビエル・フォールやケネス・ホワイト）の指摘を、日本での研究状況に接続することで新たな作品の解釈を探った。物語と類似する広重、清親の版画作品を示しつつ、登場人物の蘿月、長吉らの性格と名所のイメージとの関係が論じられた。会場からは、発表時間の都合でやや駆け足となった、名所のイメージから逸脱する箇所の理解について、更に説明を求める声が上がった。

フォルゴ・テオドーラ・マリア氏の発表は、二〇世紀前半のハンガリーの代表的作家モルナール・フェレンツの文学について史的背景やその文業を紹介しつつ、日本近代文学と芸能においてそれがどのように受容されていたかを論じた。会場からは、英独訳からの重訳とハンガリー語からの訳文あるいは原文との差異に関する質問や、モルナールの作品

を翻訳した森鷗外の文学に対する影響などを問う声があった。また、モルナールの受容について先行論の読み込みの行き届かなかった点など貴重な指摘もなされた。

運営委員（落合 修平）

支部だより

北海道支部

◎七月二十九日、函館市湯の川温泉「花びし」において、「二〇一七年度 日本近代文学会北海道・東北地区合同研究集会」が開催された。プログラムは、以下の通りである。

開会挨拶

片山 晴夫

〈研究発表〉

函館の文学

北村 巖

佐藤泰志『海炭市叙景』論

―(無縁)の集合体―

小田島本有

島崎藤村と函館―「津軽海峡」を中心に―

伊狩 弘

村上春樹文学における音と匂い

真銅 正宏

村上春樹における〈妻〉―「騎士团长殺し」

を中心に―

山崎真紀子

〈講演〉

講師紹介

神谷 忠孝

むのたけじと戦後の秋田文学―鶴田知也と

伊藤永之介―

北条 常久

開会挨拶

千葉 正昭

◎九月二日、北海道大学において、支部例会が行われた。発表者とタイトルは、以下の通りである。

〈研究発表〉

映画の「転移」と「継承」の機能について

―黒沢清の「CURE」等を例に―

中井 朋美

マンガにおける時間表象―「コマ」と

「余白」の機能を端緒として 垣花 常武

フィクションの北海道―「天体のメソッド」

論 杉本 圭吾

◎二〇一七年五月三十一日付けで、『北海道支部会報』二〇号が発行された。論文題目と

執筆者は、以下の通りである。

自由党急進派のメディアとしての『絵入自由新聞』―通俗演説会、車会党などとの関

わりに着目して―

浅野 正道

小川未明「僕も戦争に行くんだ」論

―国策協力の起点― 増井 真琴

異民族ロマンスのポリティクス―冬木憑

の樺太小説「和人」 試論 劉 淑如

「外地」メディアと小説―川端康成「東海道」

の射程―

堀内 京

林美美子後期作品研究―「盲目の詩」論―

姜 銓鏞

『会報』は一部八〇〇円(送料込み)で販売している。希望の方は、メールアドレス(hikinbun@hotmail.com)まで連絡をください。(押野武志)

青森支部

二〇一七年八月一六日、「郷土作家研究」

第三八号を発行することができた。巻頭には

座談会記録「会の歴史と小山内時雄先生の思

い出を語る集い」を掲載。相馬明文、森英一、

福村忠夫、仁平政人、高橋菊弥、館田勝弘諸

氏からの寄稿を得て、内容的には論考三編・

資料紹介三編・研究余滴一編、合計一四六頁

という分厚い仕上がりとなった。各寄稿のタ

イトルと大要については、会報一二七号の支

部だよりで記した所である。頒布を希望の方

は事務局・竹浪(takenami-naoto@yz2.so-

net.ne.jp、携帯〇九〇―七五二八―七〇六

三)まで、御連絡いただきたい。

一二月九日の午後には、弘前市立弘前図書

館の会議室で「郷土作家研究」第三八号の合

評会を開催した。合評会に先立ち行われた定

例総会では、二〇一八年八月四日(土)に弘前市で開催することが決まっている、第四五回日本近代文学会北海道・東北地区合同研究会のスケジュールが主要な議題となった。

近年この大会に参加された方には、二〇一八年の三月頃に予告と発表者募集の通知を、五月頃に正式な大会案内を、いずれも郵便にてお届けする方針である。該当しない方でも、御要望いただければ、同様に御案内をお送りすることが可能なので、前掲の事務局・竹浪まで御一報いただきたい。

大会終了後の懇親会と宿泊先については、弘前市内のホテルと交渉中で、夜は弘前ねぶたを観覧できる見通しである。翌八月五日(日)には、恒例の貸し切りバスでの文学散歩を実施するが、コースは没後七〇年に当たる太宰治をテーマに据えて決めることとした。出発地である弘前にも、太宰治まなびの家、弘前市立郷土文学館と重要な場所はあるものの、移動時間を想定しながら協議した結果、とても回り切れないことが明らかになった。そこで苦肉の策ではあるが、弘前市内のスポットも御覧になりたいという方には、前泊して各自で回られることをお勧めしたい。

まだ細部の変更はあり得るものの、大まかには以下のような行程を考えているので、検討の材料としていただけたらと思う。

- ・朝八時半頃に弘前市を出発し、五所川原市を経て、一〇時過ぎに金木・斜陽館へ
- ・太宰治疎開の家(旧津島家新座敷)を見学した後、一一時過ぎに中泊町へ出発
- ・途中で昼食を取り、一三時過ぎに小泊・小説「津軽」の像記念館へ
- ・一四時半頃小泊を出発、青森空港(一六時半頃)を経て新青森駅で解散(一六時半頃)

最後に、青森県内の文学イベントの動向について記しておきたい。青森県近代文学館ではエクステンド常設展示「映画監督・川島雄三」(五月下旬まで)が、弘前市立郷土文学館では企画展「名編集長・加藤謙一——少年倶楽部」から「漫画少年」へ(一二月二八日まで)が開かれている。青森県に足を運び、出身文学者の顔ぶれの多彩さに触れただけなら幸いである。(竹浪直人)

東北支部

十月三十日、「日本近代文学会東北支部会報」第五十五号を発行した。巻頭には馬場重

行氏の「井上ひさしの「戦後」をめぐる雑感」を掲載した。この中で馬場氏は井上ひさしの遅筆について、「地に足をつけた歴史を書き残そうと強く意思を固めていた井上ならではの覚悟の結果」とし、特に「下駄の上の卵」(一九八〇)に注目して、松坂俊夫・松本和也両氏の指摘を宜いつつ「Jアラートを象徴とする戦争への傾斜を煽るような現状に抗うためにも、「下駄の上の卵」はいま再び強く要請されなくてはならない。」と結論付けている。

これに続き、平成二十九年夏季大会の印象記を二本掲載した。笠間はるな氏による「茂木謙之介「あつちゃん」の戦争責任——内田百閒「秩父宮殿下に上るの書」論——印象記」では、今まであまり注目されてこなかった作品の批評性を、皇族表象という視点から取り出していく発表者の意欲が、まず指摘される。その後、発表の要点を三点にまとめ、全体として「テクストの細部に目を向けた精緻な読解であった」とする。ただし、「親しみの念」と「戦争責任」の関係が見えにくかったこと、同時代の言説との関係についてもさらなる積極的な読みを期待することを付記する。

仁平政人氏による「特集 怪異を通してみる日本の近現代文学（含ライトノベル）」印象記」は、この夏季大会で須藤宏明氏の司会のもと、一柳廣孝氏の基調講演と馬場重行氏・井上諭一の研究発表を組み合わせた特集についての印象記である。仁平氏は、まず一柳氏の講演について、近現代の「怪異」の問題が多面的に示された、とする。続く馬場氏の発表「川端康成「心中」を中心に」については、怪異への関心が川端の文学においていかなる意味を持つかを明らかにしようとするものであること、現実も超現実も全て（ことば）によって生成されるという点に川端の思想の所在があると論じていることを指摘する。また井上諭一の発表「往還する怪奇のモチーフ——ライトノベルを中心に」については、近代文学とライトノベルに共通するモチーフとその材源の問題を軸にすること、特に「首なし」など、時間や文脈を隔てたモチーフについて、ライトノベルがハイカルチャーへの廻行の可能性を持つこと、情報検索を伴う読書行為が想定されることを提示しているとす。総合して、近現代文学における怪異と言

特集であったと評している。

十二月二十三日、仙台ビジネスホテルにおいて冬季大会ならびに運営委員会を開催した。大会に先立って開かれた運営委員会では、特に二〇一八年度日本近代文学会秋季大会への東北支部のかかわり方について、時間を取って議論した。研究発表は 渡辺賢治氏の「幸田露伴研究「雪紛々」を中心に」一本だけとなったが、発表、質疑とも十分な時間を取ることができ、実り多いものとなった。参加者からは、むしろ学会の原点に立ち戻ったという意見が多く、今後の支部運営についても示唆に富む結果となった。詳細はやがて「会報」に印象記が載り、またそれをこの「支部だより」で紹介できることと思う。

（井上諭一）

新潟支部

平成二九年五月一四日（日）に平成二九年度第一回支部例会（シンポジウム）・総会を開催し、前号の支部だよりで報告した。その後、支部例会開催を予定していたが、諸般の事情により、開催がかなわなかった。平成二九年度活動として、今後さらに、平成三〇

年一月および三月の二回、県内各地を会場に支部例会を開催する予定である（次号にて報告する）。

（堀 竜一）

北陸支部

○北陸支部では、以下のとおり例会をおこなった。

九月例会

九月一六日、於・金沢大学サテライト・プラザ（金沢市）

研究発表 團野 光晴（石川工業高等専門学校）

「金沢大学校歌」をめぐって——室生犀星の戦後——

発表者は、室生犀星が作詞した「金沢大学校歌」（一九五九年五月二九日制定、作曲は信時潔）をめぐって、その成立事情を明らかにしたうえで歌詞の精緻な分析を行い、戦後新制大学として発足した大学を取り巻く状況における校歌の意味と共に室生犀星の作詞技法を検討した。校歌前半に登場する「白山」の隠喩をめぐって、新保千代子宛葉書（一九五九年六月八日）を手掛かりに、「かけろふの日記遺文」や『蜜のあはれ』における

現実と超現実あるいは夢幻の世界を交錯させることよって高度な象徴を生み出す技巧が、近い時期に創作された「金沢大学校歌」にも共通して見られることを指摘した。その上で、校歌後半部の「新風文化の扉は開かれ／あたらしの人、世代にあふれ」によって、前半部分で形成した象徴を、戦後思想における新しい大学像と結びつけているとした。さらに、校歌を作詞した室生犀星、彼に依頼した学長戸田正三、犀星から作曲を依頼された信時潔らが、いずれも戦時中は戦争遂行において影響力を持っていた点にふれて、戦後の新しい時代の大学像を打ち出している校歌制作に戦争の影が伴っている点を指摘したことが重要であろう。

質疑応答においては、犀星が作曲を依頼した信時潔の作曲技法との関わりを問う質問等のほか、室生犀星の作詞した「金沢大学校歌」の第一聯「天うつなみ けぶらひ／天そそる白ねの／北方のみやこに学府のありて／燦たる燈をかかげたり。」における冒頭二行の表現が象徴するものについての解釈をめぐって質問・議論が盛り上がった。「天そそる 白ねの」が金沢から遠望する加賀の白山を指し

ているという点に関しては見解が一致したものの、「天うつなみ けぶらひ」が何を歌っているのかという問題に関して、発表者は「天で波打っている波」「雲海」であると解釈し、それが「けぶら」っている中、二行目で「雲海」を突き抜けて聳える白山のイメージが浮かび上がってくるものとの解釈を提示した。それに対して、日本海の波を歌っているのではないかという意見も提出された。「四高」寮歌等において用いられる表現との共通性、戸田正三の使者が犀星宅を訪問した際に持参した資料などの制作依頼時の状況に関する質問も出た。

○二〇一七年度の北陸支部大会は、二〇一八年二月三日(土)に開催予定。スケジュールは以下の通りである。
研究発表(一五時〜)

和田康一郎
「ユキと五反田君の白骨―村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』」
杉山欣也

「島崎藤村のブラジル訪問を考える 相互交流の観点から」
研究発表の後、研究会場となる湖月館が所

蔵する福永武彦関連資料等の「資料紹介」が行われる。翌二月四日(日)には、近藤圭一氏(聖徳大学准教授)を招き、九時から能登地方と日本近代文学(福永武彦を含む)をめぐる文学散歩を実施する予定。(鈴木暁世)

東海支部

日本近代文学会東海支部第五九回研究会は、二〇一七年七月一日(土)に愛知淑徳大学星ヶ丘キャンパスで開催された。三名の発表者が研究報告を行った上、コメントーターが質問と意見を述べた。

鈴木まな氏の報告「山田詠美『ソウル・ミュージック・ラバース・オンリー』、粋(クール)のテキスト―音楽、表象、文化的アイデンティティをめぐって」は、テキストにおけるソウル・ミュージックの官能的な効果を分析しながら、従来の黒人表象によくあるドラッグや、失業問題、差別問題などのモチーフを取り除いた「粋(クール)」なアフロアメリカン像を読み解こうとした。また、この作品は人種、セクシュアリティ、占領などの問題を巧妙に迂回しつつ、それらの政治性を山田詠美という作家個人のイメージに引

き受けさせるテクストであると主張した。

報告に対して、竹内瑞穂氏は、「ソウル・ミュージックと官能的イメージの関係性」や、「アフロリアメリカンの政治的複雑性」、「受容する主体」などの点が曖昧であり、検討する余地があるとコメントした。

岡英里奈氏の報告「紀行文の時代」と島崎藤村―紀行文が書けない旅人の藤村―は、明治三〇〜四〇年代島崎藤村の「紀行文的テクスト」を考察したものである。複数の作品から藤村の「旅する自画像」を抽出し、その紀行文を可能にした「美文による見立て」が、言文一致によって不可能となったことを論じた。また、伊豆の旅を描いた島崎藤村の「旅」、田山花袋の「北伊豆」、蒲原有明の「豆北豆南」を比較し、花袋と有明の物語世界は「旅」に終始することに對して、藤村の物語世界は「金」など外部の実生活によって進入されていることを明らかにし、この「紀行文の時代」における作家の特異性を見出した。

報告に対して、酒井敏氏は、藤村の紀行文的表現と小説との関係性や、改造社の『島崎藤村集』と『山陰土産その他―藤村紀行文集』などを通じて、藤村の同時代的位置付けをよ

り多角的に検証できると指摘した。

佐藤綾佳氏の報告「中上健次『地の果て至上の時』論―作品構造に関する一考察」は、『地の果て 至上の時』の作品構造を分析した。まずは、主人公秋幸が「近親相姦」と「異母弟殺し」という通過儀礼を経て「父殺し」へと向かう際に、「水の信心」、「路地跡」という二つの要素が共同体秩序の動揺を意味するものとして描かれていることを言及した。そして、「父殺し」、「水の信心」、「路地跡」という三つの要素がテクストにおいて切り離せないものであると述べた。

報告に対して、二瓶浩明氏は「先行研究への目配りが不十分」と指摘し、フロアからも、「中上健次の差別観における天皇制への意識を考える必要がある」といった意見が寄せられた。

報告のテーマはそれぞれだったが、隣接ジャンル・芸術との間テクスト性や、作家の自意識とテクストとの相関性、「差別」などデリケートな問題を孕んだテクストの扱い方など、重要なヒントが多く示された研究会だと思われ。

(尹芷汐)

関西支部

二〇一七年度関西支部秋季大会は十一月十一日(土)近畿大学東大阪キャンパスで開催された。自由発表のみの四本である。

天野勝重氏は「明治三五年の東本願寺紛擾―遠因としての成島柳北」と題して報告した。『航西日乗』に記されているように、柳北は現如上人が欧米に漫遊したとき随行している。そこには石川舜台の名も随行者として記載されている。舜台は「傑僧石川舜台言行録」などでは汎仏教主義とでもいふべき理想を求める人物とされているが、その現如と舜台とは明治三十五年にスキャンダルを引き起こし、『読売新聞』紙上に一ヶ月にわたって記事が掲載された。それを克明にたどることにより、柳北との関わりを考察した。

アブラル・バスイル氏の「永井荷風『花瓶』論―『花瓶』の象徴性をめぐって―」は、『腕くらべ』の出現を示唆するもの(吉田精一)という読解や、『芸術の勝利』(坂上博一)を象徴すると解されていた作品について、登場人物である政吉とお房の過去と現在が交錯された形で語られているのを、時間軸に

そつて整理して捉え直した。そのことにより、二人の結婚は政吉が会社を辞めた事情と前後して起きたことが明らかとなり、両者の「花瓶」に対する思いの正体もあらわれてくる。こうしたことから同時代の荷風小説に描かれる芸術志向についても再考しようと試みた。

宮本和歌子氏の「江戸川乱歩「屋根裏の散歩者」完成の地の今昔」は、表題どおり乱歩の「屋根裏の散歩者」の後半部分が完成した場所が、三重県亀山市関町にある岩屋観音という寺であることがわかったという報告である。「屋根裏の散歩者」の前半部分は、当時居住していた大阪市守口市の借家で書かれたことは乱歩もエッセイに記していた。が、後半部分を完成させた場所は、「乱歩の実父が宗教的な病氣治療のために参籠していた」「三重の山奥」としか記しておらず、その具体的な地名は長く不明であった(宮本)のをつとめた。

吉田大輔氏の「幸田露伴「幻談」における固着、切断、創意工夫をめぐって」は、「幻談」前半部のウインパー『アルプス登攀記』を典拠とする再話と、「幻談」後半部に語られる出来事は、主題が近接しているというだけで

なく、細部の類縁性―それはロープや釣糸のようななびも状のものが固着し、ふいに切断されるといった―によっても接続しているのではないかと指摘した。また類話との大きな差異として、後半部で重要な役割をはたす釣竿や釣糸がいずれも金銭によって購われたものではなく、水死者の創意工夫が結実した事物として描かれていることに着目し、露伴が人間の創造をどのように捉えていたか、その意義を考察した。

関西支部では春季大会を六月二日(土)、京都大学にて開催します。「更新される「明治」(仮題)」という企画を予定しています。詳細は、関西支部ホームページを後日ご覧いただけるかと助かります。支部会員外のご来聴もお待ちしています。(斎藤理生)

九州支部

九州支部では、春季大会(山口大学)に続いて2017年度秋季大会を熊本県立大学で開催した。予定では研究発表4名と講演1名であったが、発表者の一人であるカイロ大名誉教授・久留米大学比較文化研究所教授アハマド・ラハミー氏が急病のため緊急入院

したので、研究発表は次の3名となった。なお、アハマド氏は手術成功し、12月より職場復帰した。

研究発表・講演は以下の通りである。

◆研究発表

【1】昭和二十一年の「坊つちゃん」―雑誌『苦楽』創刊号の「名作絵物語」をめぐって (九州大学大学院 高槻 侑吾)

【2】鳥尾敏雄文学における〈他者〉表現―火野葦平と比較して― (久留米大学大学院 ガーダ・アブデルカリム)

【3】現実と虚構を取り換える―澁澤龍彦と三島由紀夫― (熊本大学 跡上 史郎)

◆講演

修復用紙としての八女和紙―筑後の伝統工芸の可能性をさぐって― (久留米大学 狩野 啓子)

最初の発表「昭和二十一年の『坊つちゃん』は、終戦後間もない昭和二十一年十一月に東京で創刊された雑誌『苦楽』創刊号に掲載された「名作絵物語シリーズ」第1回の「坊ちゃん」についてであった。

『苦楽』は、昭和21年11月から24年9月まで発行が確認されている月刊誌で、「時世にたいする叛骨心や一種国粹的な姿勢から、回顧的趣味的傾向が強く」（『日本近代文学大事典』）と評されている、大佛次郎が始めた雑誌である。執筆者には、上司小剣、久保田万太郎、菊池寛、白井喬二、里見弴、長谷川伸、室生犀星、長与善郎、正宗白鳥、佐藤春夫、武者小路実篤、広津和郎、宇野浩二、尾崎士郎、山本周五郎、中川与一、海音寺潮五郎、芹沢光治良などの大家を揃え、全体として娯楽性の濃い雑誌であった。「名作絵物語シリーズ」は、漱石「坊ちゃん」「三四郎」「虞美人草」のほか、一葉「たけくらべ」「にこりえ」、梶牛「瀧口入道」、芥川「羅生門」「地獄変」、谷崎「お艶殺し」「春琴抄」「細雪」、鏡花「高野聖」「日本橋」、鷗外「雁」「阿部一族」「魚玄機」などの作品の印象的な場面に、中川一政、木村莊八、伊藤深水、川端龍子、鍋木清方、小磯良平、小杉放庵など大家の画家のさし絵をつけた、江戸の黄表紙の様な娯楽読み物のスタイルであった。

発表者は、創刊号の名作絵物語「坊ちゃん」を取り上げ、選択した大佛の意図について、

アメリカニズムに対する抵抗と敗者の正義感である、とした。

文壇・画壇の大家を揃えた戦後一時期の娯楽雑誌の存在を明らかにした事が注目された点で、多様な観点での研究の発展が期待される発表であった。

次の発表「島尾敏雄文学における（他者）表現」は、火野葦平『麦と兵隊』と比較して論じたものである。

発表者は、まず島尾敏雄の表現の基盤を、その実人生の体験から探り、島尾文学の特徴は、幼少年時の繰り返された転居、特攻隊体験、妻の狂気などより「自己存在の探求」型であるとした。その上で、島尾の戦争文学である「出孤島記」を対象にして、その中の他者表現について、日本人兵隊、島民、「N」を取り上げ、火野葦平「麦と兵隊」作中の他者表現である日本人兵隊、中国人と比較して以下のように論じた。日本人兵隊について、火野「麦と兵隊」においては「私」の内部者であるのに比し、島尾「出孤島記」の「私」として他者である。中国人について、火野「麦と兵隊」においては「私」に比しての他者であるのに比し、島尾「出孤島記」の「私」

にとつて、島民と「N」が他者であると述べ、火野「麦と兵隊」が内部者と他者とはつきりと区別されるのに対して、島尾「出孤島記」ではそうなっていない。結局そのことは、島尾敏雄文学の内閉性を証するものである、とまとめた。今後、他者論として、発展が期待される発表であった。

最後の発表「現実と虚構を取り換える」は、没後30年の澁澤龍彦について、三島由紀夫と比較して論じたものである。

澁澤と生前の三島との交友・関係については、たとえば澁澤の『三島由紀夫おぼえがき』という唯一日本人作家名を冠した書物や、ほかにも松田修「三島由紀夫と澁澤龍彦」、梶尾文武「サドの読みかた」遠藤・澁澤・三島」という文章や倉林靖「澁澤・三島・六〇年代」という書からも言える、と述べる。その上で、澁澤の三島観は1970年の三島の死後、変貌したと述べる。その証として、三島「小説とは何か」（1970・1）の柳田「遠野物語」の解釈について、澁澤は「ランプの廻転」（1977・5）で「明らかに三島の論理の短絡」「二つの現実の混同があるような気がする」という文章を挙げ、発表者は「現

実にランプを回転させようとする三島と、虚構は虚構として離れて眺める澁澤？」と述べている。同じく三島「小説とは何か」での「小説とは、構成上の必然性がなければならず、プロットは因果関係の上に成り立たねばならぬ」を取り上げ、澁澤「梓物語には私も大いに関心がある」(「物語は不可能か」1980・9)と対比させて論じた。

澁澤と三島、両者の具体的作品を比較した分析の手腕も見てみたいと思わせる発表であつた。

講演は、大会会場が被災地熊本であることから、資料修復や資料保存の観点からのものであつた。

講演者の狩野啓子氏は、地域貢献の一環として勤務先大学に「筑後文化資料室」を設置したが、その折、収集した資料の大量の紙魚に困惑した。そこで地域の伝統工芸でもある和紙の防虫和紙の開発を思いついた。そこで理系の研究者の協力で、「有害生物忌避シートまたは紙状物」の開発に成功した。そこから文化財保存修復和紙として注目され、特に海外の美術品修復に期待されている現状である、と述べられた。

講演ではパワーポイントが使用され、顕微鏡写真など、文学の講演とは趣の違ったスタイルで、極めて興味深かつた。(浦田義和)

事務局より

◎二〇一七年度秋季大会は、一〇月一四日（土）・一五日（日）に、愛知淑徳大学星ヶ丘キャンパスにて開催されました。一日目は、特集「ポスト文学史のアクチュアリティ——正史解体後の展望」としてシンポジウムが行われました。二日目は四つの会場で、一・二名の方の個人発表と、三つのパネル発表がありました。二日間を通して多数の参加者を迎え、各会場とも活発な質疑が行われて盛況裡に終えることができました。開催にご尽力いただきました小倉斉氏をはじめ、会場校のみなさまに厚くお礼申し上げます。

◎二〇一七年度一・一月例会は、一月二六日（日）に立教大学で、第三回目の国際研究集会として開催されました。パネル発表や個人発表のほかに、今回は国際研究集会としては初めて坂井セル氏による講演が行われました。開催にご尽力いただきました金子明雄氏をはじめ、会場校のみなさまに厚くお礼申し上げます。

◎九月二九日に行われた理事会および一〇月一四日に行われた評議員会において、二〇一八年度春季大会、六月例会の企画が承認されました。それぞれの企画内容については本会報でお伝えしているとおりです。みなさま、多数のご参加をお待ちしております。

◎二〇一八年度春季大会は、五月二六日（土）・二七日（日）の二日間、早稲田大学教育学部で開催されます。特集として「明治文学再考——政治性と〈情動〉の領域」を企画しております。また今大会では、通常では一日目に行われる特集シンポジウムが二日目の日曜日に開催となりますので、ご注意ください。

◎二〇一八年度六月例会は、六月三日（土）、中央大学多摩キャンパスで開催されます。特集企画「虚構の〈国家〉——現代文学の闘争と批評性」を準備しております。

◎二〇一八年度秋季大会は、一〇月二七日（土）・二八日（日）の二日間、岩手県立大学で開催されます。個人発表・パネル発表を募集中です。会員の皆様の積極的な応募をお願いいたします。

◎二〇一八年度一・一月例会は、一月二四日（土）、明治学院大学白金キャンパスにて開催されます。

◎本年度は、役員の改選時期にあたり、「評議員会運営および選出に関する内規」、「理事会運営および選出に関する内規」に従い、以下のような手順で二〇一八・二〇一九年度理事、監事、評議員が選出されました。

なお、各役員のお名前は、二〇一八年度運営委員、編集委員のお名前とあわせて、この項の最後に別掲しております。

▽七月二二日、理事を除く評議員に評議員選考委員選挙の文書を発送し、八月八日、運営委員長立ち会いの下で開票した結果（有効投票数八〇票、以下の方々が出選されました。（五〇音順・敬称略）

安藤宏 石川巧 一柳廣孝 小平麻衣子
金子明雄 久米依子 紅野謙介 十重田裕一 日比嘉高 和田博文

▽九月八日、評議員選考委員会が開催され、監事候補三名、評議員候補九五名を選出しました。本選出は、「評議員会運営および選出に関する内規」の六の（２）の変更（二〇一七年五月二七日改正、施行）に則

して行われました。一〇月二〇日、第二回臨時理事会において、評議員候補五名が追加選出されました。一〇月二一日、選出された監事候補三名、評議員候補一〇〇名に一〇月三一日締め切りで就任の諾否を確認したところ、監事候補三名、評議員候補九九名の承諾を得ました。

▽十一月八日、承諾を得た九九名と支部長八名を合わせた評議員一〇七名のうち、二期目の理事と次期編集委員長および次期運営委員長長の三名を除いた一〇四名を被選挙人として、二〇一八・二〇一九年度理事選挙の文書を発送し、二月二日、尾形明子監事、宮坂覺監事立ち会いの下、開票しました。その結果、一〇名の理事が選出されました(有効投票数九一票)。

▽三月八日、二〇一八年度第一回理事会が開催され、代表理事が選出されました。また、総務、財務、海外交流、日本文学関連学会連絡協議会の各担当理事の決定がなされました。二〇一八年度運営委員、編集委員の委嘱がなされました。

二〇一八・二〇一九年度役員(敬称略)

〔理事〕

宗像和重(代表理事) 安藤宏(関連学会)
石川巧(編集) 一柳廣孝(関連学会) 金子明雄(財務) 紅野謙介(総務) 島村輝(海外交流) 竹内栄美子 坪井秀人(海外交流) 山口直孝(運営)

〔監事〕

阿毛久芳 小林幸夫 下山嬢子

〔評議員〕

青木稔弥 跡内史郎 有元伸子 安藤恭子
安藤宏 石川巧 石川則夫 石田仁志 石原千秋 一柳廣孝 井上隆史 上田敦子
生方智子 大井田義彰 大塚常樹 大塚美保 大野亮司 大橋毅彦 大原祐治 奥山文幸 押野武志 小平麻衣子 金井景子
金子明雄 川口隆行 川津誠 木村小夜 木村功 久保田裕子 久米依子 五井信高 高築蘭 紅野謙介 国生雅子 小松史生子 小森陽一 五味測典嗣 斎藤理生 坂井セシル 酒井敏 佐藤泉 佐藤伸宏 佐藤秀明 佐野正人 篠崎美生子 柴田勝二 嶋田直哉 島村輝 庄司達也 杉浦晋 須田千里 関谷博 副田賢二 高橋修 田口道

昭 田口律男 竹内栄美子 谷川恵一 谷口基 千田洋幸 坪井秀人 十重田裕一

鳥羽耕史 内藤千珠子 永井聖剛 中川成美 中根隆行 中丸宣明 中村三春 波瀾

剛 西川貴子 西田谷洋 根岸泰子 野中潤 朴裕河 馬場美佳 浜田雄介 日高佳紀 日比嘉高 深津謙一郎 増田周子 松下浩幸 松本和也 光石亜由美 宮内淳子 宮崎真素美 武藤清吾 宗像和重 山岸郁子 山口直孝 山口政幸 山崎眞紀子 山崎正純 山下真史 山田俊治 山本亮介 吉田昌志 和田敦彦 和田博文

〔支部長〕

片山晴夫 館田勝弘 高橋秀晴 堀竜一

林正子 杉山欣也 浅子逸男 浦田義和

〔運営委員〕(〇は新規の方です)

山口直孝(委員長) 安西晋二 〇内田裕太 〇加藤夢三 金子亜由美 康潤伊 〇北山敏秀 鬼頭七美 金ヨロン 〇五井信 〇小松史生子 〇田部知季 〇西田谷洋 能地克宜 帆莉基生 堀井一摩 宮坂康一 〇山中剛史 〇吉田竜也 〇渡部麻実

〔編集委員〕（○は新規の方です）

石川巧（委員長） ○安藤恭子 猪狩友一
石田仁志 ○大杉重男 ○押野武志 掛野
剛史 加藤邦彦 倉田容子 ○佐藤泉 ○
嶋田直哉 ○高橋孝次 ○多田藏人 千田
洋幸 ○馬場美佳 古川裕佳 松下浩幸
光石亜由美

◇会議の記録

◎理事会

9月29日 第三回理事会。会員状況について報告があり、新入会員が承認された。運営委員会の二〇一八年度計画として春季大会特集案「明治文学再考——政治性と〈情動〉の領域」、六月例会特集案「虚構の〈国家〉——現代文学の闘争と批評性」が承認された。秋季大会は岩手県立大学で、一ヶ月例会は明治学院大学で開催することが確認された。編集委員長より機関誌刊行と編集についての報告がなされた。学会会計の現状と課題について審議検討がなされた。また、日本文学関連学会連絡協議会について、大会および国際研究会集會時の託児スペースの運営などについて審議され承認された。

10月14日 第一回臨時理事会。役員選挙に關して審議検討された。

10月20日 第二回臨時理事会。役員選挙に關して審議検討し、理事会枠として評議員候補五名が追加選出された。

◎評議員会

10月14日 第二回評議員会。理事会、運営委員会、編集委員会より二〇一七年度の事業中間報告がなされ、運営委員会、編集委員会の二〇一八年度事業計画が承認された。

春季大会特集案「明治文学再考——政治性と〈情動〉の領域」、六月例会特集案「虚構の〈国家〉——現代文学の闘争と批評性」が承認された。また、秋季大会は一〇月二七日（土）・二八日（日）に岩手県立大学にて開催されること、一ヶ月例会が明治学院大学で開催されることが承認された。日本文学関連学会連絡協議会について、大会および国際研究会集會における託児スペースの運営について報告があった。学会会計の現状と課題についての提案があり、継続審議となった。また、春季大会時の評議員会および総会で承認された二〇一六年度の会計報告について誤りがあったことが運営

委員長より謝罪とともに報告され、「前年度損益修正」として次回の会計決算報告のさいに修正することが提案され承認された。

◎編集委員会

9月16日 第五回編集委員会を開催。第九七集の最終校正をおこなうとともに、第九八集（二〇一八年五月刊行予定）の「展望」のテーマと執筆依頼者の検討を行った。

10月7日 第六回編集委員会を開催。ロシア高等経済学院東洋学研究所の事務担当者からの『日本近代文学』を定期購読するための申し入れの手続きについて検討をするともに、引き続き、第九八集（二〇一八年五月刊行予定）の「展望」テーマと執筆依頼者の検討を行った。

10月27・28日 東京外国語大学での秋季大会発表者に論文投稿の意欲を電子メールにて行った。（連絡は運営委員会に依頼）

11月4日 第七回編集委員会を開催。第九八集への投稿論文の査読結果を協議した。また、「書評」「紹介」対象図書を選定と執筆依頼者の検討を行った。

12月7日 大会発表者の投稿を締め切り、その査読分担当を決め発送する。

1月6日 第八回編集委員会を開催。再投稿論文と大会発表者投稿論文の審査、また「書評」「紹介」対象図書を選定と執筆依頼者の検討を行った。さらに、大会・例会発表者への徳憑のあり方について検討した（継続審議）。

◎運営委員会

7月22日 第五回運営委員会。会報一二七号について。会員資格の確認について。秋季大会および一月例会の国際研究集会のタイムスケジュール・役割分担・印象記・発表者への連絡について。託児について。今後の大会・例会企画についての検討。

9月9日 第六回運営委員会。大会ポスターの發送作業。会報一二七号について報告。二〇一七年度秋季大会印象記執筆者への依頼。国際研究集会準備と発表者への連絡確認。学会会計の課題について。託児について。今後の大会・例会企画についての検討。

10月7日 第七回運営委員会。委員長より理事會報告。秋季大会印象記執筆者について。来年度の大会・例会会場について。秋季大会および国際研究集会の役割分担・スケジュール、会場下見について。学会会計の

課題および前年度決算の誤りについて。託児について。今後の大会・例会企画についての検討。

11月18日 第八回運営委員会。秋季大会の報告。会報一二八号の編集日程について。国際研究集会のスケジュール・役割分担について。会場校下見の報告。託児について。今後の大会・例会企画についての検討。

12月16日 第九回運営委員会。国際研究集会の報告。会報一二八号の編集について。今後の大会・例会の企画について。二〇一八年度春季大会の個人発表およびパネル発表の選考。六月例会について。

1月20日 第一〇回運営委員会。会報一二八号編集の進捗状況。今後の大会・例会企画について。二〇一八年度春季大会の会場について。二〇一八年度秋季大会の企画について。その他。

◎会員計報

荒木茂氏（二〇一六年二月ご逝去）
山内祥史氏（二〇一七年四月三日ご逝去）
原子朗氏（二〇一七年七月四日ご逝去）
木村幸雄氏（二〇一七年九月二五日ご逝去）
浦西和彦氏（二〇一七年二月二六日ご逝去）

伊豆利彦氏（二〇一七年二月八日ご逝去）
ご冥福をお祈りいたします。